

日本IT書紀

04 含牙篇

卷之八 重濁

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

04 含牙篇

卷之八 重濁

060 機密戦争日誌

061 鹵獲品

062 その名はジーク

063 戦場の計算機

064 真珠湾の次

065 空母対空母

060 機密戦争日誌

第六十

機密戦争日誌

一

本書は「戦記もの」ではないので、第二次大戦、ことに太平洋戦争について、その経過を詳細に語る紙幅を持たない。ただ、次の観点から、太平洋戦争のポイントとなった事実を積み重ねようと考えている。

その観点とは、

- ① ようやく国内で普及段階にあった計算機の利用を中断した重大な事件であったこと。
- ② きわめて計数的な手法で運営されたこと。
- ③ その運営に当たっては長期にわたる多くの可変数の組み合わせを必要としたこと。
- ④ 意思決定において情報の収集と分析が重きをなしたこと。
- ⑤ 計算機ばかりでなく、様々な電子機器が彼我の優劣と勝敗の決定に関与したこと。

- ⑥ 極限の競争状況の中で新しい技術が開発されたこと。
- ⑦ ときに個人の能力が思いもせず発揮され、戦局を左右したこと。

——などである。

そこで戦争の経過を語りつつ「情報」（計算機で処理されたデータの意味に限定しない）というものを概観していきたい。主に使用した文献資料は、世界文化社『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』、岩波新書『太平洋戦争』、柳田邦夫『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』、秦郁彦『戦後史の謎を追う』などである。

教科書日本史などでは、一九四二年（昭和十六）十二月八日から四五年（昭和二十）八月十五日までの戦争は「第二次大戦」の呼称で一括りにされる。ただ、この戦争は大きく二つの局面、すなわち太平洋戦争と大東亜戦争で成り立っている。

ざっくりいえば、太平洋戦争は海軍の、大東亜戦争は陸軍の戦いだっただ。海軍と陸軍は戦争の思想が異なっていたから、経緯にも自ずから質的な相違がある。そのことは追々明らかになる。

表題の『機密戦争日誌』は、終戦直後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の度重なる調査にもかかわらず発

見されなかつた。ポツダム宣言無条件受諾の報が伝わると、戦争犯罪の証拠となりそうな大量の書類が焼却された。

『機密戦争日誌』も煙になつて消滅したと考えられていたが、紆余曲折を経て門外不出の機密文書として防衛庁図書館に秘蔵されることとなつた。

一九九八年十月、錦正社が刊行した際に付された序文には次のようにある。

今回防衛庁防衛研究所所蔵の大本営陸軍部第二十班（戦争指導班）の昭和十五年六月一日から二十年八月一日に至る業務日誌「機密戦争日誌」を刊行することが出来たことは、本会にとつても多くの研究者にとつても大きな慶びとする所である。元来大本営内の各部課でも業務日誌を作成していたと思われるが、現存するものはこの第二十班（戦争指導班）のもののみである。敗戦にあたり、書類焼却指令が出されていた中で、これが残存しえたのは一人の庶務将校が焼却に忍びなく、これを含む一連の文書を密かに隠匿したことによるのであつて、今日となつて我々はその恩恵に預かることが出来るのである。

極東裁判が終結し、サンフランシスコ講和条約が発効して以後、初めて一部関係者にその実在が知らされた。太平

洋戦争に関する日本側の第一級資料とされている。

その日誌には一九四一年八月二十二日のこととして、

陸軍省案を加味したるものにて部長会議開催。前後四時間にわたり審議し、対米英戦決意を決定す。次長、対米英戦決意の意見牢固たるものあり。約一ヶ月にわたり、苦悩に苦悩を重ねたる結果、戦争決意に到達したものの如く、次長の意見は極めて強固なり。右案果たして海軍または政府と意見一致するや否やに關し、総長以下大なる疑問を持ちあり。一致三分不一致七分と考えるあるが如く、内閣瓦解は必至なるべし。

と記している。

文中の「次長」は塚田攻（中将）、「総長」は杉山元（大将）を指している。攻は「おさむ」、元は「げん」と読む。

塚田は一八八六年（明治十九）茨城県に生まれ、一九一四年（大正三）陸軍大学を卒業した。関東軍参謀、中支那方面軍参謀長、陸軍大学校長などを経て四〇年に参謀本部次長に就任していた。

翌四一年十一月、南方軍参謀長となり、四二年十二月、第十一軍司令官のとき、中国・南京から帰国の途中で搭乗していた飛行機が墜落して死亡した。死後、大将に昇進し

ている。

杉山は一八八〇年（明治十三）生まれ、福岡県出身。一九〇〇年（明治三十三年）陸軍士官学校を卒業し、日露戦争に従軍した。一九一〇年（明治四十三年）に陸軍大学校を卒業、一九一五年（大正四）駐インド大使館付武官。

二八年（昭和三年）陸軍軍務局長に進み、第十二師団長、航空本部長を経て三六年（昭和十一年）教育總監・大将に昇進した。林銑十郎内閣、第一次近衛内閣で陸相、一九四〇年に参謀総長に就任した。四三年元帥となり、四五年九月十二日、拳銃で自決した。

先回りだが、杉山の自決について話しておく、巷間に流布しているのは、

——戦犯として逮捕されるのを忌避した。

という説である。

おそらくこの説は正しいのだが、杉山が自決した理由は逮捕と裁判への恐れではなかった。陸軍大臣、参謀総長、元帥という経歴からいって、死刑か無期懲役は回避できない。

実をいうと、その前日、杉山は新しい憲法の草案を目にしていた。天皇制が護持できること、民主国家への転換が図られること、戦争の放棄が明文化されていることを確認したうえで、この覚悟だった。心情的にいえば潔いサムライ的

な、客観的にいえば身勝手な完結であったといつて差し支えない。

二

八月二十二日付の『機密戦争日誌』は、「対米英戦決意」の文字が現れる最初とされている。さらに近衛内閣が崩壊し東条内閣が発足した十月十八日、第二十班は手放して喜んでゐる。

いかなることあるといえども、新内閣は開戦内閣ならざるべからず。開戦、開戦、これ以外に陸軍の進むべき途なし。

ところが二か月後にトーンが一変した。

・十月二十三日付

陸相は絶対に目途なしとして、内閣を倒したるものなり。今更目途なき対米外交を続行し、決心をにぶらせるは国家の不為ならずや。陸相に節操ありやと問ひ度。

陸相に節操ありや、とは穏やかでない。

参謀本部職員が東条を「陸相」と呼んでいるのは、東条が内閣総理大臣でありながら陸軍大臣、内務大臣を兼務していたからである。また批判に転じたのは、東条が首相に就任したとき、内大臣・木戸幸一が「陛下のお言葉」として、

——慎重なる考究を加えることを要す。
と耳打ちしたことによつていた。

東条はこの一言で、開戦一本やりから慎重論に転換した。十一月一日に開かれた連絡会議に先立って、東条は参謀総長・杉山元を首相官邸に招いて会談した。そのとき東条が示した案は三つあった。

- 一、戦争を極力避け臥薪嘗胆する。
- 二、開戦を直ちに決意し、政戦略の諸施策をこの方針に集中する。
- 三、戦争決意のもとに、作戦準備を完整すると共に、外交施策を続行して妥結に努める。

「政戦略」は見慣れない熟語だが、連合艦隊司令長官・山本五十六がいうところの「攻勢作戦」のことであろう。緒戦でアメリカ、イギリスを叩き、攻めに攻めて優勢うちに講話を結ぶという作戦である。

これに対して杉山は言った。

「外交がうまく行けば準備した兵を下げることになる。これは困る。内地から二十万、支那からもやるべき作戦をやめて兵を送つておる。兵を南洋まで出して、戦争しないで退けたら、士氣に關す」

外交がうまく行けば戦争という事態を回避できるのだから、喜ぶべきであらう。ところが杉山は「困る」と言う。

御前会議で決定された要綱に従つて、陸軍はすでに十個師団以上の兵員を南方に輸送しつゝあった。武器弾薬や食糧なども、着々と準備を整えていた。いままら引き揚げを命じることはできない。「士氣に關す」とは、何とも逆立ちした言い分であつた。

杉山の一言で東条は第一案を放棄した。そもそも同腹だったのだから当然といえば当然だったが、ここで東条は開戦決意の責任を杉山に転嫁したともいえる。

この決定が出て以後の『機密戦争日誌』は、ひたすら日米交渉の決裂、戦争の勃発を望む内容に変わつている。その記述を見るに、戦略や計画といった頭脳回路を使う作業が一切欠落していて、あるのは好戦的な感情である。陸軍参謀本部に勤務する佐官たちは、政府の決定に面従腹背する増長傲慢ぶりであつた。

・十一月十三日付

来栖大使の飛行機遅々たるは可。「ル」大統領、来栖大使を迎えるの態度に熱意なきが如きは、また可なり。

・十一月十七日付

昨は妥協、今日は決裂、一喜一憂しつ時日は経過す。一刻も速かに十二月一日の来たらんことを禱る。

・十一月二十一日付

野村電到着。乙案提示せるところ、「ハル」は援蔣中止に関し、これは援英中止要求と同様なりとて、大いに不満の態たりしが如し。さもあるべし。これにて交渉はいよいよ決裂すべし。目出度めでたし。

・十一月二十三日付

対米交渉の峠もここ数日中なり。願わくば決裂に到らんことを祈る。

・十一月二十七日付

米の回答全く高圧的なり。交渉は勿論決裂なり。之にて帝国の開戦決意は踏み切り容易となれり。目出度く之天佑ともいふべし。

・十一月二十九日付

午前九時三十分より総理、重臣を宮中に召集し、開戦決意に関し説明諒解を求む。参集の重臣左の如し。

阿部、林、岡田、米内、若槻、広田、平沼、近衛、原。

更に御前に於て重臣と懇談す。非戦論少なからず。独り阿部、林、広田は首相の決意を諒とせるが如し。他の非戦論者に対しては総理、阿部、林、広田が説得之勉め、最後に於て全員同意し、政府を鞭撻する所あり。

国家興亡の歴史を見るに国を興すものは青年、国を亡ぼすものは老年なり。重臣連の事勿れ心理も已むなし。若槻、平沼連の老衰者に皇国永遠の生命を托する能わず。

陸軍参謀本部の中堅将校にかかつては、「元老」と称され「重臣」とされた人々も形無しであった。

三

第二次大戦の太平洋戦争は、日本軍が真珠湾を奇襲で攻撃したことがクローズアップされる。だがアメリカ海軍も日本との開戦を前提に、準備行動を開始していたことは意外と知られていない。

国防衛計画「レインボー5号」の中の海軍基本戦略

「WPL46」がそれである。

それによるとアメリカ軍は、太平洋に浮かぶミッドウェー、ウエーキ、ジョンストン、パルミラ、サモア、グアムの諸島を結ぶラインを第一の防衛線に想定していた。十月十六日に発令された作戦に従って、アメリカ海軍は次のように艦船の配備を強化した。

・ジョンストン島に第三機動部隊・重巡洋艦一、駆逐艦五

・ミッドウェー、ウエーキ・潜水艦各二。

・サモア・重巡洋艦一、機雷敷設船一

・第十二機動部隊（基幹空母「レキシントン」）海兵隊
戦闘機十八機を増強。

このような増強は日本を挑発するに等しかった。

ただしアメリカ政府および両軍司令部は十一月二十七日の時点でも、日本軍が戦端を開く正面はインドシナ半島からフィリピン、ボルネオにかけての南西太平洋地域と予測していた。この方面には、イギリスとオランダの両極東軍が控え、かつアメリカはフィリピンに八万人の兵力を有していた。

アメリカ、日本の双方ともに、

「もし相戦わば」

と想定していたのは、西南太平洋地域ないし、中南太平洋地域（小笠原諸島―マリアナ諸島を結ぶ海域）だったから、ミッドウェー、ウエーキへの守備隊派遣は予防的措置以外のなにもでもなかった。

ハワイに本営を置いていたアメリカ太平洋艦隊が睨んでいたのはマリアナ、フィジー、サモア、サンゴ海、フィリピンの海域だった。

広大な海域を守るのにアメリカ太平洋艦隊は航空母艦四隻、旧式で訓練用の「ユタ」を含む戦艦五隻しか保有していなかった。相手の出方を覗うより他にどんな手があるのか。

一方、日本帝国海軍はロシア艦隊を打ち破った東郷平八郎の兵略が、脳裏に強くこびついていた。長駆やってくる敵の大艦隊を真正面で待ち受け、敵艦隊より射程距離が長く破壊力が大きな大艦巨砲で決戦を挑む、という考え方である。

このため対米開戦を準備するに当たって海軍参謀本部が描いたのは、小笠原諸島からマリアナ諸島にかけての海域での艦隊決戦だった。

ところが山本五十六が指示したのは、日米の共通認識から大きく外れたハワイ強襲作戦だった。その研究は一九四

一年の一月、山本から直接、第十一航空艦隊参謀長（少将）の大西瀧治郎に伝えられたとされている。大西は四月に案をまとめ、山本に直接手交した。艦隊幕僚に正式な研究課題として示されたのは五月である。

当初、幕僚たちは山本の考えに反対、もしくは懐疑を示した。

理由は四つあった。

第一の理由は、相手を英・蘭に限定すべきである、というものだった。アメリカを巻き込むのは絶対的な不利を生じさせるであろう。大局的な視点で見るとき、この主張は正しかったともいえるし、遅かれ早かれアメリカが参戦してくることを考えれば消極的に過ぎた。

第二は、日本ないし周辺のどこから出航するにせよ、敵に気づかれずにハワイまで三千哩（カイリ）の航行を成し得るかどうか。

第三は、仮にハワイ近海にたどり着けたとして、そこに敵艦隊が待ち受けていたら、勝算はどうか。

第四は兵を訓練する時間だった。

これに対して山本は言った。

——戦争というものは、勝っても負けても神様が喜ぶことではない。これは博打である。

~~~~~ 補注 ~~~~~

『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』一九七八、世界文化社。収録論説の著者は大宅壮一、青地晨、児島襄、江崎誠致、高木俊朗、巖谷大四、島田俊彦、杉森久英、加藤秀俊、小松伸六、河北倫明である。

『太平洋戦争』上・下 児島襄、一九六五、中央公論新社。中公新書。

『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』 柳田邦男、一九七七、文藝春秋。『零戦燃ゆ』(飛翔編、熱闘編、渾身編)はその続編として位置づけられるが、より広範に太平洋戦争を追っている。

『戦後史の謎を追う』上・下 秦郁彦、一九九三、文藝春秋。

秦 郁彦 はた・いくひこ／1932～…山口県に生まれ五六年東大法学部を出てハーバード大学、コロンビア大学に留学した。防衛研修所教官、防衛大学校講師、大蔵省財政史室長、プリンストン大学客員教授、千葉大学教授。

『機密戦争日誌』 一九四〇年六月一日から一九四五年八月一日まで、大日本帝国陸軍大本営陸軍部第二十班(戦争指導班)の業務日誌。日誌担当者として種村佐孝、原四郎、野尻徳雄、田中敬二、甲谷悦雄、橋本正勝の六人の名前が挙がっている。

一九四五年八月十四日、庶務を担当していた中根吾一という少尉が上官の山田成利という大佐の許可を得て搬出し、ドラム缶に入れ自宅の敷地に埋設した。それを元第二十班員の原四郎が継承した。

種村佐孝 たねむら・さこう／1904～1966。名の読みは

「すけたか」とも。ポツダム宣言にかかわってはソ連と同盟して対米戦争を継続する工作に従事した。最終階級は大佐。

原 四郎 はら・しろう／1911～1991。終戦時は陸軍中佐だった。戦後、航空幕僚監部調査課長、戦史編纂官を経て伊藤忠電子計算サービス取締役となった。読売新聞社長副社長・原四郎(1908～1889)とは同名異人。

野尻徳雄 のじり・のりお/生没年未詳。戦後、陸上自衛隊幕僚監部第四部長、第十師団長となった。

田中敬二 陸軍大学校輜重兵科卒。終戦時は参謀本部作戦課・陸軍大佐だった。

甲谷悦雄 こうたに・えつお/国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、ドイツ大使館付武官補佐官、関東軍参謀、参謀本部ロシア班長、参謀本部露西亜班長、大本営一部十五課長、独逸大使館付武官補佐官とある。「旧帝国陸軍切つての国際共産主義運動の分析官」とされる。

橋本正勝 はしもと・まさかつ/国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、関東軍補給参謀、軍務局課員、大本営参謀、第二総軍参謀とある。終戦時、陸軍中佐。

『機密戦争日誌』序文 誤解を避けるために改めて書くと、この序文は『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌』全三巻(防衛研究所図書館所蔵、軍事史学会編、一九九八、錦正社)が出版された際、伊藤隆氏(軍事史学会会長・政策研究大学院大学教授)が「刊行にあたって」と題して付記したものである。

レインボーイ5 第二次世界大戦前、アメリカ合衆国が有事を想定して策定していた基本計画。レインボーイ1はナチス・ドイツ軍が南米に上陸した場合、同2はアメリカがイギリス、フランスと連

合して大西洋でナチス・ドイツと、太平洋で大日本帝国と戦う場合、同3はアメリカが単独で大日本帝国と戦う場合、同4は1、2、3のバリエーション、同5は大西洋・欧州大陸での戦い（対ナチス・ドイツ戦）を優先する場合を想定していた。ナチス・ドイツとイギリスが同盟を結んだ場合、ソ連を仮想敵とする軍事プランもあったといわれる。

## 061 鹵獲品

鹵獲品

一

確認の意味で一九四一年十二月から四二年四月末までの出来事を書き出す。参照したのは岩波書店『日本史年表』（歴史学研究会編、一九九三）である。

一九四一年

- 12・6 ナチス・ドイツ軍、モスクワ攻略に失敗
- 8 日本軍、マレー半島に上陸。  
ハワイ真珠湾を空爆
- 新聞、ラジオの天気予報・気象報道中止
- 9 中国国民政府、日独伊に宣戦布告。  
大韓民国臨時政府、対日宣戦布告
- 10 マレー沖海戦（イギリス極東艦隊壊滅）  
グアム島を占領
- 11 独・伊、対米宣戦布告

15 第78回臨時議会召集。

16 戦艦「大和」竣工。

電球の切れ球との引き換え販売開始。

19 言論出版集会結社等臨時取締法公布

21 タイと軍事同盟条約締結（日泰共同作戦二関スル協定）

25 日本軍、香港占領

29 南方熊楠没（享年七十四）

一九四二年

1・1 食塩の通帳配給制実施。

連合国26か国が共同宣言

2 日本軍、マニラを占領

8 大東亜戦争国債発行

9 学徒勤労動員開始

25 タイ政府が対米宣戦布告

2・1 衣料、味噌・醤油販売に切符制実施

2 大日本婦人会発足

4 イギリス軍、エジプトでクーデター

5 蒋介石、インドを訪問

6 英米が合同参謀本部を発足

15 シンガポールが陥落（英軍マラーヤ司令部司令官

パーシバル中将が日本軍に降伏）

18 第一次戦捷祝賀で特赦

インド国民会議、反英決議

3・1 日本軍、ジャワ島に上陸

7 大本営政府連絡会議「戦争指導大綱」策定

8 日本軍、ラングーンを占領

9 日本軍、ジャワ島を制圧（オランダ軍降伏）

11 アメリカ極東軍司令官マッカーサーマッカーサー

ー将軍がフィリピンを脱出

13 中国軍、ビルマ戦線に参戦

29 フィリピン抗日人民軍結成

4・5 日本軍、コロンボを空襲

11 日本軍、バタワン半島を制圧

日本が米英宣戦布告に踏み切ったとき、ヨーロッパ戦線は大きな転換期を迎えていた。ナチス・ドイツのロシア攻略が失敗に帰したのだ。

いわゆる「バルバロッサ」作戦がそれで、ナチス・ドイツは百三十五個師団三百八十万人の兵を投入した。これこそが、史上最大の作戦だった。モスクワ陥落を企図したのではなく、東欧エリアからスラブ系民族を追放して、ドイツの植民地化するのがねらいだった。

作戦が発動されたとき、ナチス陸軍首脳は

——二か月もあれば片がつく。

と考えていた。

ところが車両が足りなかった。

燃料もなかった。

例えばレニングラード攻略を目指した北方面軍は、レニングラードまで五百マイルの地に設置した本営を六月二十二日午前三時を期して進撃を開始したものの、二十四日に燃料不足のため機甲部隊が停止してしまった。

このときは空路で燃料を補給したが、二十六日にいたって再び燃料切れのため全軍が足止めとなった。

このようなことでは埒が明かない。

そこで、前線に補給基地を建設しよう、ということになった。

進撃が再開されたのは七月四日だったが、一週間後にまた燃料が切れてしまった。この間にソ連軍は応戦準備を整えることができた。

電撃作戦というと威勢がいいが、実態はこのようなものだった。そもそも「電撃」とか「奇襲」というのは、持たざるものの作戦であって、スポーツと同様、長期戦に持ち込まれると実力の差がはつきりする。

ナチス・ドイツ敗退のニュースを大本営はどうとらえたか。

——我らには大和魂がある。  
ぐらゐに考えていた可能性なしとしない。

二

戦争につきまとうのは戦死、戦傷だけではない。捕虜と鹵獲品が必ず出る。戦いに勝った側にとって、捕虜は有用な情報源であり労働力であると同時に、食糧や医療の点では負担になる。

ただ、純粹に軍事的な観点では、日本軍によるマレー攻略作戦、インドシナ侵攻作戦は「絵に描いたような」と形容するに十分な成功だった。またフィリピンの攻略作戦は、上陸からマニラ侵攻までは順調そのものだった。緒戦の南方作戦は、全体として予想をはるかに上回る戦果をあげたといっている。

例えばマレー攻略作戦で日本軍が受けた損害は、戦死三千五百七人、戦傷六千五百五十人の計九千六百五十七人だった。またインドシナ侵攻作戦での戦死は八百四十人、戦傷は一千七百八十四人の計二千六百二十四人である。

これに対して日本軍に降伏したのは、インド軍の六万人を筆頭に、イギリス軍三万八千人、オーストラリア軍一万八千人、マレー義勇軍一万四千人の約十三万人だった。攻

め入った日本軍の総兵力が四万人弱だったのだから、日本軍は作戦終結とともにその三倍以上の食糧や居住地を支配しなければならなくなった。

インドシナ侵攻作戦で連合国軍は兵力をほとんど損傷せず、日本軍に降伏した。ここでも捕虜は七万人を上回った。フィリピンでは、バターン半島および、コレヒドール要塞に立てこもっている連合国軍はせいぜい三万人というのが日本軍の予想だった。ところが白旗をあげて出てきたのは、アメリカ軍一万二千人、フィリピン軍六万四千人の計七万六千人、さらに市民が二万六千人もいた。そのうち三分の一がマラリアに罹り、全員が飢えていた。日本軍にとって不幸な誤算が、バターン死の行軍を生み出した。

物的な戦果（鹵獲品）はどうだったか。

マレー侵攻作戦で日本軍は大量の兵器・武器を押収した。火砲約七百四十門、重軽火器二千五百挺以上、小銃類約六万挺、自動車約一万台、機関車・貨車約一千輛、戦車・装甲車約二百輛、航空機十機などである。

インドシナ侵攻作戦では、パレンバン製油所を接收したほか、ジャワ島のスラバヤにあったオランダの工廠を接收し、これを陸軍から海軍が譲り受けて艦船の補修基地に活用した。このちスラバヤ工廠に松尾三郎（のち日本電子開発、北海道情報大学を創業）が海軍大尉として赴任し、



レーダーの必要性を痛感することになる。

フィリピン制圧作戦で、日本軍はコレヒドール要塞から三千トンの食糧品を発見した。ハム、ベーコン、缶詰、タバコなどが、アメリカ軍が使っていたトラックで運び出された。

このとき、陸軍は要塞の中に不思議な機械装置を発見した。すでに触れているように、ホレリス式パンチカード統計会計機械装置「IBM405」一式のだが、兵士たちは首を傾げるだけだった。ただ、何かしら特殊な機械であるらしいことが分かった。

参謀本部に問い合せると、「ただちに本国に輸送せよ」という回答が返ってきた。しかし、

—— 貴重な機械なので慎重に扱え。

と付け加えなかった。

その不思議な機械は、駆逐艦の甲板に据え付けられ、その年の夏、東京・目黒の海軍研究所に運び込まれた。連日、陽に焼かれ汐に晒されたために、全体が赤サビで覆われていた。研究所員たちはその赤サビを落とす作業から始めなければならなかった。

パンチカード式計算機であることは分かったが、アメリカ軍が何のために使っていたのかは分からなかった。まさか給与計算や受発注管理のために、ではあるまい。コレヒ

ドール要塞に設置されていたからには、軍事的な意味があるはずだった。

陸軍の兵器行政技術部長だった中将・小池国英が電気試験所の部長・山内二郎に

—— 戦場で数学を使うとしたら何だ？

と問いかけたが、答えは出なかった。

砲弾の発射角を計算するために、第日本帝国の海軍は軍艦の砲塔で電動のヘンミ計算尺を使っていた。しかしパンチカード式計算機は持ち運ぶには大きすぎ、重すぎる。

実はアメリカ軍はIBM405を兵站の管理ばかりでなく、暗号の解析に使っていたのだが、日本にはその発想そのものがなかった。

軍中樞が暗号に数学理論が欠かせないことに気がつくのは四二年末、組織的な取り組みが始まるのは四三年の七月、参謀本部に発足した特殊情報部である。ホレリス型パンチカード式会計分類機械装置のコピーを作った話は後述する。

### 三

鹵獲品を押収したのは日本軍だけではない。連合国軍も日本軍から様々なものを押収した。ただし連合国軍が手に入れたのは、ガラクタの類だった。とりわけアメリカ軍が

ガラクタの収集に熱心だった。

ハワイとマリアナ諸島を結ぶ線上のほぼ中間点に、「ウエーキ」（または「ウエーク」と呼ばれる島が浮かんでいる。珊瑚礁でできた小さな三つの島——ウィルクス、ウエーキ、ピール——が、「V」字型に並び、最大のウエーキ島ですら、長さ七キロ、幅は最も広いところで約二キロしかない。

ここにアメリカ海軍はウインフィールド・カニングラム中佐を指揮官とする守備隊五百二十三人を配置していた。このほかに島民を主体とする設営隊が千三百余。「V」字の三つの頂点にそれぞれ砲台があり、開戦の直前にウエーキ島飛行場に十二機の戦闘機「F4Fワイルドキャット」が配備されていた。

日本軍が真珠湾を攻撃した、という報せが入ったとき、飛行隊長のブットナム少佐は——ここにも日本軍がくる。

と考え、上空警戒のため四機を発進させた。

四機は高度三千四百メートルに待機していた。ところがマーシャル群島クエゼリン環礁の基地から飛んできた日本軍の零戦と九六式陸上攻撃機計三十四機は、高度六百メートルという低空で侵入した。そのために哨戒機はまったく気がつかなかった。

日本軍機はウエーキ島の地上施設——無線司令室、燃料タンク、機材倉庫、滑走路——などに爆弾を落とし、滑走路に駐機してあった八機のワイルドキャットに機銃掃射を浴びせた。それによって八機のうち七機が大破・炎上し、残る一機も穴だらけになった。

上空を哨戒していた四機は急を知らせる無線を受けて急降下したが、舞い降りたときには日本軍機ははるか遠くに去っていた。燃料タンクから黒煙がもうもうと上がり、滑走路は穴だらけになっていた。着陸したとき、四機のうち一機が横転し、エンジンが壊れてしまった。十二機だった戦闘機は、たった数分で四機になった。

ここからウエーキ島航空基地の「奇跡」が始まる。部隊に手先が器用なジョン・キニーという大尉がいて、彼は徹夜の作業で二機を飛べるように修理したのだ。

ウエーキ島航空隊の戦闘機は四機から六機になった。翌日も日本の九六式陸上攻撃機が二十七機の編隊でやってきて、空襲を行った。

三日目には九六式陸上攻撃機が二十六機やってきた。

アメリカ側の記録によると、ウエーキ島航空隊は、二日目に日本の爆撃機を一機、三日目に二機を撃墜したことになる。

十二月十一日未明、日本海軍の軽巡洋艦三、駆逐艦六、

哨戒艇一、潜水艦六、輸送船二から成る第一次ウエーキ島攻略隊が上陸作戦を開始した。このとき、沈黙を守っていた島の砲台が火を吹いた。

十分に牽き付けた上での射撃だったので、撃ち出す砲弾のすべてが日本の艦船に当たった。直近弾を受けて駆逐艦「疾風」が轟沈、駆逐艦「追風」「弥生」に被害を与えた。さらにワイルドキャット四機が襲いかかった。支援部隊の軽巡洋艦「天龍」「龍田」小破、駆逐艦「如月」轟沈。

#### 四

日本軍は上陸をあきらめて撤退していったが、ウエーキ島守備隊も甚大な損失に直面していた。

六機のワイルドキャットのうち一機が砂浜に不時着陸して炎上、もう一機もエンジンがばらばらになってしまった。その四時間後、今度は九六式陸上攻撃機十七機が襲来し、守備隊の戦闘機三機（日本側記録では二機）が撃墜され、十四日の空襲でさらに一機を失った。ウエーキ島航空隊はこれで壊滅したことになる。

だがキニー大尉はあきらめなかった。破壊されたワイルドキャットの部品をかき集め、徹夜の作業で飛行可能な機体を二機、再生したのである。ウエーキ島の航空隊がよみ

がえった。日本軍はそのことを知らなかった。

十二月二十二日、機動部隊からウエーキ島攻略の支援に回った空母「蒼龍」「飛龍」から発進した九七式艦上攻撃機三十三、零戦六の編隊が攻撃した。その際、日本軍はワイルドキャットの反撃を受けて大いに驚いた。日本軍は航空機二機を失い、その代償としてワイルドキャットの残機をすべて撃墜した。

日本軍にとって、ウエーキ島のアメリカ海軍守備隊は「こしゃくなヤツ」であった。

たった四機の戦闘機のために、駆逐艦二隻を失い、九六式陸上攻撃機を何機も撃墜され、攻撃を始めてから一週間たっても占領できずにいる。

業を煮やした帝国海軍軍令部は、次の作戦行動の準備にあつた機動部隊の一部を割いてウエーキ島攻略の「支援」に当たらせることにした。「支援」というのは機動部隊の面子を立てた表現であつて、実態は主力の入れ替えである。

その陣容は、空母「蒼龍」「飛龍」の二隻を中軸に、重巡洋艦「利根」「筑摩」「青葉」「衣笠」「加古」「古鷹」の六隻、駆逐艦「夕風」「朝風」の二隻、輸送船「聖川丸」「天洋丸」の二隻、計十隻の大艦隊である。

ウエーキ島は、長さ七キロ、最大幅約二キロの珊瑚礁の島に過ぎない。しかも守備隊の兵力は四百人を切るまでに

減少していた。

「たかが」であった。

十二月二十三日は皇太子の誕生日だった。

日本軍は同日午前零時から上陸作戦を開始し、三時間後に陸戦兵を乗せた二隻の哨戒艇が砂浜に乗り上げた。とたんに前面の陣地から砲撃があり、哨戒艇が炎上した。その炎の中に千を上回る日本兵が見えた。

守備隊は絶望的な状況のなかでよく戦った。真つ暗な中でマングローブや灌木に潜み、手榴弾と機銃で日本軍陸戦隊の進軍をはばみ、最後は銃剣とナイフで白兵戦を展開した。だが多勢に無勢だった。

民間人七十人を含む百二十人の戦死者、四十九人の戦傷者を出し、ついに降伏した。死亡した民間人七十人の大半は、攻撃二日目に爆撃された病院の入院患者だった。対して日本軍は戦死四百四十、戦傷百五十九。

アメリカ軍は日本軍のガラクタを集めるのが、ことのほか好きだった、ということを書いた。

その最初のガラクタ集めが、このウェーキ島攻防戦の中で起こっていた。

海岸からほど近くに轟沈した駆逐艦「疾風」の中から、アメリカ海軍は文書の束を回収した。海水に浸っていたために、紙がゴワゴワになっていたが、文字は鮮明に読むこ

とができた。島の守備隊が日本軍に降伏する直前の十二月二十日、飛行艇が着水し、紙くずのようになった文書の束を運び去った。

それは日本海軍の暗号書だった。

このことが戦局を微妙に、そして最後に大きく動かしていく。

## 補注

大韓民国臨時政府 大韓帝国が日本領に編入された一九〇九年、中国の上海にあつた抗日組織を母体に樹立され、二九年の光州学生事件など反日闘争を指導した。李承晩が大統領に推戴され憲政体制のもとで立法機関である臨時議政院、司法機関である法院、行政機関である國務院で構成する民主共和制政府として機能した。

戦艦「大和」 一九四一年十二月に竣工し、四二年二月就役して連合艦隊旗艦となつた。ミッドウェー海戦に参加したが決戦に間に合わず、その後一年以上をトラック島に停泊しているだけという時代遅れの巨大戦艦だつた。主砲の四十六センチ砲が発射した砲弾は三百十一発だつたと記録されている。

シンガポール陥落 直接原因は水源を日本軍に握られたことであつた。パールは飲み水に毒が投じられることを恐れたのであつた。

パール Arthur Ernest Percival / 1880.7.16.62. イギリス下層階級の生まれで陸軍の一兵卒から出世し、ナチス・ドイツとの戦いではダンケルクに追い詰められた英仏連合軍二十二万人の救出作戦を指揮し、ドイツ空軍機の激しい爆撃のなかで十八万人強を救出することに成功した。のち極東軍司令官に任じられたが、本国から増援のない状況でよく戦つた。シンガポール陥落に伴う山下奉文への無条件降伏は「イエスカノーカ」の問答で有名だが、日本軍の捕虜となつてのちもイギリス、オランダ軍捕虜をよく統率した。またミズーリ号甲板上で行われた日本の降伏文書署名にイギリス軍代表として出席している。

マッカーサーとフィリピン マッカーサーの父親であるアーサー・マッカーサーが陸軍中将だつたとき、フィリピン軍政官として赴任していた。息子ダグラスにとつては第二の故郷といふべき土地だつた。のち四三年一月、アメリカ海軍省作戦部長キングが提案した中部太平洋からの日本軍攻略方針に対し、「フィリピン開放の時宜は逸した」として独自の戦略を開陳した。結果としてマッカーサーの戦略が採用された。

バターン死の行軍

コレヒドール攻略戦に参加していた第四百十一連隊隊長の今井武夫(当時大佐)は、戦後、アメリカ軍から事情聴取を受けたとき、「他の方面での出来事だと考えた。まさか自分が目撃した捕虜の行軍のこととは夢想だにしなかつた」と語っている。

マレー侵攻作戦 一九四一年十二月～一九四二年二月：対英戦争。  
インドシナ侵攻作戦 一九四二年二月：対仏・蘭戦争。  
フィリピン制圧作戦 一九四一年十二月～一九四二年五月：対米戦争。

バルバロッサ作戦 Unternehmen Barbarossa：一九四一年六月二十二日に開始され十二月五日に終了した。ナチス・ドイツは枢軸国軍三百八十八万人超、車両六十万台、馬匹六十万頭超を投入した。ラトビア、リトニア、ペラルーシ、ウクライナ、モルドバといった東欧圏からスラブ系住民を追い出してドイツの植民地にするヒトラーの構想(夢想)に基づいた史上最大の侵攻作戦だつた。四一年十月二日から四二年一月七日にかけて行われたモスクワの戦いでドイツ軍が劣勢に陥つたことが、第二次大戦の趨勢を転換させた。

陸軍兵器行政本部 一九四二年から四五年まで陸軍省の外局とし

て設置された。陸軍の兵器・弾薬などについて、製造・補給、研究開発・試験、教育を一元的に統括した。

小池国英 こいけ・くにひで／1892～1959。

山内二郎 やまうち・じろう／1898～1984。のち情報処理学会会長となった。

ウエーキ島 「ウエーク」とも。第二次大戦後、同島の飛行場は拡張整備され太平洋航空路の中継点として重きを成した。

ウィンフィールド・カニングム Winfield S. Cunningham／1900～1986。ウエーキ島の戦いで日本軍の捕虜となり、横浜を経て上海の収容所に送られた。第二次大戦後、海軍に復帰し、一九五〇年七月、少将として退役した。

カニングム守備隊 一九四一年十二月三日、真珠湾から空母エンタープライズでウエーキ島に配備された。制式名称は海兵隊第211戦闘飛行隊である。

F4Fワイルドキャット 一九三六年三月にアメリカ海軍が発注したF3F複製式戦闘機の後継機としてグラマン社が開発した。「F4F-1」複製機をベースに、単葉・全金属製に改良した。

ブリュースター社の「F2A」(バッファロー)と並んで太平洋戦争における連合国軍の主力戦闘機となった。イギリスでは「マーレット」と呼ばれた。

最大速度は五百三十一キロ/時、最大航続距離は二千七百二十キロで、十二・七ミリ機銃四基、九十キロ爆弾二個を装備した。

航空母艦に収納するため翼を折りたたむようにした4型が一九四一年から自動車メーカーのラインで増産され、第二次大戦全期を通じて計七八百機が生産されている。日本の零戦に比べて上昇・旋回性能が劣ったものの急降下性能や防弾設備、武装、高空

性能等で勝っていた。またエンジンの馬力が零戦より強かったため、零戦に比べ墜落や失速が少なかった。このため搭乗員の生存率が高かったといわれる。

守備隊の健闘 ウエーキ島守備隊の健闘はルソン島コレヒドール要塞の戦いと並んでアメリカ合衆国本土で大いに宣伝され、太平洋戦争に挑むアメリカ国民の気持ちを奮い立たせた。

062 その名はジーク

第六十二

その名はジーク

一

日本の大本営は、アメリカ連合艦隊の殲滅と、マレーの迅速な攻略に重きを置いていた。

開戦初期にアメリカとイギリスに決定的な打撃を与えることは、太平洋の戦局を有利に運ぶ以上の意味があった。それによって、ヨーロッパ戦線におけるナチス・ドイツ軍の優勢を確定させ、短期間に有利な条件で太平洋戦線を終結できると見ていたためだった。そこでマレー攻略作戦では、飛行場の占領・確保と、敵航空兵力の壊滅に全力をあげた。

イギリス領マレーの連合軍兵力は、英国陸軍のパーシバル中将を総司令官に、将兵八万八千人、航空機二百五十四機だった。具体的にいうと、イギリス正規軍が一万九千六百、オーストラリア第八師団が一万五千二百人、インド第三軍が三万七千人、マレー義勇軍が一万六千八百人だった。大日本帝国陸軍参謀本部は航空兵力を二割ほど多く、

陸戦兵力を二割ほど少なく見積もっていたことになる。配備されていたイギリス軍の航空機は、戦闘機が百十二、爆撃機が八十六、軽爆撃機が十五、電撃機が三十六、飛行艇が五だった。だが、戦闘機百十二機のうち五十二機、爆撃機八十六機のうち十五機は整備中で実戦に使用できない状態にあった。

極東軍総司令官のポーハム大將は対日開戦に備えて、歩兵二個旅団、爆撃機四戦隊、戦闘機二戦隊の増派を本国に求めたが、ロンドンではそれどころではなかった。ナチス・ドイツによる空襲を受けていたためだった。それでも極東軍には実動可能な航空機が百二十機以上配備されていたのだから、日本軍に痛打を与えることはできたはずだった。

ところが十二月八日、午前零時過ぎにインド軍第八旅団ドラグス大隊が太平洋戦争「最初の一発」を撃つてから数時間のうちに実動可能機数は五十機に減少し、翌九日には十機になってしまった。ほとんどが地上駐機中に日本軍機の掃射や投弾を受け、大破・炎上した。

このときイギリス極東艦隊司令長官（中将）トーマス・フィリップスは、

——艦隊を港湾にとどめておくのは危険である。  
と考えた。

彼が警戒したのは潜水艦による魚雷攻撃だった。艦隊主



力をシンガポール近辺にとどまらせておくのは、日本軍に好餌を与える以外の何ものでもない。

味方偵察機からの情報では、日本軍が動員している艦船は戦艦一、重巡洋艦二、軽巡洋艦二、駆逐艦二十だった。

対してフィリップス中将が率いる極東艦隊は航空母艦こそ欠けていたものの、超弩級旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」以下、巡洋艦三、駆逐艦

四、砲艦三を保有していた。数においてほぼ互角である。

そこで彼は、艦隊決戦を決意した。

十二月八日午後五時半過ぎ、イギリス極東艦隊「Z部隊」はシンガポール港を出撃した。

十日午前零時五十二分、シンガポールの司令部から「日本軍がクアantanに上陸中」という報せが入った。

このため、艦隊は針路をクアantan沖に変更した。上陸作戦を遂行中の日本軍に、沖合から艦砲射撃を加えようというのである。

サイゴンの日本軍航空基地からは四百マイル（六百七十キロ）も離れている。

——であれば、日本の航空機の攻撃を懸念することはない。

とフィリップス中将は考えた。

ところが日本の航空機は、例えば零戦は最長で八百八十五マイル（千四百八十キロ）、隼は九百八十マイル（千六百四十キロ）を給油なしで飛行することができた。サイゴンからの四百マイルは、日本軍航空機にとってはぎりぎりだが射程圏内だった。

フィリップスは開戦初日と二日目に、イギリス極東軍の航空機を大破・炎上させた日本軍機が、どこから飛んできたのかを考えるべきだった。

アメリカから供与された戦闘機「バッファロー」について、ブルック・ポーハム大將が

「イギリス本土の防衛用としてはスピードが遅い。しかしマレーでは十分に間に合う」

と評価した背景には、有色人種に対するヨーロッパ人（ないし白人種）の過大な自信があった。

実際には、一九四一年九月十九日、フリーマンという駐華アメリカ大使館陸軍武官補（大尉）が、日本の新型航空機に関する情報を本国および、連合国に発信していたのだが、彼らは頭から信用しなかった。

いわゆる「フリーマン・レポート」がそれで、黄河上流の甘肅省蘭州上空で中国軍の対空砲火で撃墜された日本軍の軍用機についてだった。

レポートは

「日本機はすべて、蘭州から約四百五十マイル離れた山西省运城基地からやってきた」

と記し、さらに「タイプ・ゼロ」として

- ・単座追撃機、低翼単葉、全金属製。
- ・推定時速二百六十マイルで六時間の飛行をする。
- ・武装は、すべて固定式。
- ・機首にプロペラの回転と同調させた七・七ミリ機銃二丁。
- ・一丁当たり、通常弾、曳光焼夷弾、炸裂弾を約五百発装填。
- ・両翼に二十二・二ミリ機銃が二丁、それぞれに七十五発の銃弾を装填。

など、詳細なデータを収集していた。

細かな点で誤りがあったにしても、レポートは日本が驚異的な性能を備えた軍用航空機を実戦配備したことを告げていた。だがイギリス極東軍の首脳部は「日本がそんなに優れた飛行機を作れるわけがない」と決めてかかっていた。イギリス極東軍はそのツケを払わなければならなくなつた。

ナチス・ドイツの超弩級戦艦「ビスマルク」を航行不能にいたらしめたのが本国の航空機部隊だったことを、パリシバルやフィリップスは思い出すべきだった。

## 二

太平洋戦争の緒戦でアメリカ軍が得た教訓は、

——日本軍はバカにできない。

ということだった。大航海時代からこのかた、西洋ないしキリスト教白人世界が有色人世界との戦いにおいて、存亡の危機を実感する戦いを挑まれた経験はない。

ことに航空機の性能には目を見張るものがあった。イギリス極東艦隊が潰え、アメリカ太平洋艦隊が真珠湾に沈んでしまったため、連合国軍は制海権を失った。

そのいづれもが艦隊決戦によるものではなかった。例えば日清戦争でも日露戦争でも、あるいは第一次大戦における大西洋上でも、主力戦艦が真正面から砲撃を交わし、その結果が戦争の勝敗優劣に結びついた。

ところが今回の戦争は、航空機が艦隊を沈めていた。それはヨーロッパ戦線でも同様だった。

ナチス・ドイツ軍が優勢にあるのは、メッサーシュミット社やフォッカーウルフ社の戦闘機が制空権を守っている

ためだった。すなわち、可及的速やかに建造しなければならぬのは航空母艦だった。一九四一年から四三年にかけて、アメリカが新たに建造した艦船を見ると、この考え方が現実反映されていたことがよく分かる。

また、アメリカ軍が着手したのは、航空機の増産だった。零戦に撃ち落されても、搭乗員さえ救出できれば新しい航空機で戦線に復帰できる。

一九四一年の七月から十二月にかけて生産された航空機は一万三千五十機だったが、一年後には倍以上の二万三千三十二機を生産している。自動車メーカーのラインが戦闘機生産のためにフル稼働した結果だった。

大量の爆弾を敵の頭上に落とし、大量の兵士や兵器を輸送できる大型機の増産と開発が本格化した。また新型戦闘機の開発が火急の課題となった。日本の「タイプ・ゼロ」に対して、従来の主力戦闘機「ワイルドキャット」は操縦性能、航行速度、旋回能力において、「P-51」は破壊力と航続距離において敵わなかった。

とはいえ、当面は「タイプ・ゼロ」と戦わなければならない。

まず戦闘機の改良が始まった。

コクピットの外壁と搭乗員の座席背後に分厚い鉄鋼の板が張られ、燃料タンクの内側に三重のゴム皮膜が施された。

分厚い鋼板が零戦の機銃を撥ね返し、ゴムの皮膜を施すことによって燃料タンクが被弾しても火が発生しなくなる。さらに翼に装備した機銃を大口径のものに変更した。

これらの措置によって長身で大柄な搭乗員は窮屈な思いをし、機体の重量がかさんで航続距離が短縮され、旋回性能が落ちた。だが搭乗員の生命を護ることができる。

次いで、新しい戦法が編み出された。

一つは「単機で闘うな」だった。

アメリカ軍は、ゼロ一機にワイルドキャット二機で当たるようになった。戦法を編み出した少佐の名から「サッチ・ウィーブ」と名づけられ、アメリカ航空機戦力の壊滅を防いだ。

背後に付かれたら急降下で逃げろ、ということも徹底的に教え込まれた。

その一方、アメリカ南西太平洋方面軍は一九四二年一月、オーストラリアのメルボルンに「航空技術情報部隊」(TAIU)を設置するとともに、ダグラス・マッカーサー大将の名で太平洋に展開する全軍に次のような指令を発した。

「墜落した敵機の捕獲機体または残骸または搭乗員を、航空技術情報部隊が可能な限り速やかに完全な管理下に置く権限を持つことを承認する」

墜落した日本軍航空機の残骸から調査するのである。そ

のためにアメリカ軍は、日本軍航空機を運び出すマニユア  
ルを作って諸部隊に配布し、ばかりでなく専用の小型空母  
まで建造した。

ここに、フランク・マッコイという陸軍大尉が存在した。  
この人物が「タイプ・ゼロ」の全貌を解明していくことにな  
る。

三

日本軍の零式戦闘機（零戦）に関する記録は、数多く残  
されている。

両翼幅約十二メートル、全長約九メートル、全重量約二  
千五百キログラム、二〇〇〇ccのエンジンで最高速度五  
百四十キロ/時、航続飛行距離一千五百キロという性能は、  
太平洋戦線の緒戦時、おそらく世界で最高レベルにあった  
といっている。戦記は零戦がいかに優れていたかを語り、  
設計と開発の辛苦が伝えられる。

実際、制式採用された最初、中国大陸で行われた空中戦  
で、零戦は三十機で敵戦闘機三十七機を撃墜、被弾ゼロと  
いう華々しいデビューを飾った。赤松貞明、武藤金義、岩  
本徹三、杉田庄一、西澤廣義、坂井三郎、笹井醇一、太田  
敏夫、水谷竹雄、本田敏秋といった多くの撃墜王が誕生し

た。

零戦乗りでいちばんの暴れん坊として知られた赤松は、  
戦後、酒に酔うと

——オレは三百五十機以上を撃ち落とすとした。

と自慢した。その中には地上に駐機してあった敵機も含  
まれているらしい。ただ一九四五年五月二十五日に、千葉  
県上空に侵入したアメリカ軍「P-51」（ムスタング）七  
十五機の編隊に単機で突入したのは、紛れもない事実であ  
る。その戦いで一機を撃墜し、自身は無傷で厚木基地に帰  
ってきた。

岩本徹三は、二百二機を落とすとした、と主張している。ラ  
バウル航空隊のエースであって、

——機体の色が違って見えた。

という逸話がある。桜色の撃墜マークが機体を覆うまで  
に描きこまれたためだった。

当人の主張と日米双方の正式な記録がほぼ一致するのは  
坂井三郎である。彼が撃墜した連合軍航空機は六十四機と  
されている。

一九四二年の五月、ポートモレスビー攻撃に出撃した彼  
は、部下の西澤廣義、太田敏夫とともに零戦三機で編隊を  
組み、敵基地上空で宙返りをやってのけた。数日後、ポー  
トモレスビーの連合国軍陣営から、

「先日の宙返りは素晴らしかった、今度来るときは緑色のマフラーをつけてこられたし」

という手紙が届いた。

——撃ち落して進ぜよう。

というのである。

谷水竹雄は日本の劣勢が明らかになった四三年後半、ラバウル航空隊のエースだった。

「機動性に富み、迅速に横転ができるヘルキャットがいちばん手強かった。その点、小回りが利かないF4U、P—38は一撃離脱で容易に撃ち落すことができた」

と語っている。B—29を含め、計三十二機の撃墜が記録されている。

こうした記録は、零戦の優れた戦闘性能と突出した個人技によって作られた。だが工業製品として見たとき、果たしてどうであるか。

三菱重工業名古屋航空機製作所（名航）の堀越二郎は優れた技術者だが、軍が要求する性能を実現するために精緻に作りこんだ。精緻というだけでなく、生産に従事したのは動員された女学生だったりした。このために量産が難しくなった。

近代戦で量産が難しいということは致命的な欠点だった。それは堀越の問題ではなく、量産を前提にした性能要求を

設定できなかつた日本の軍部の欠陥だった。

#### 四

フランク・マッコイは一九三七年にオクラホマ大学の法学科修士課程を卒業し、いったんは弁護士になったが日米開戦を機にカンザス州の陸軍大学将官課程に進んだ。陸軍大学ではわずか六週間で卒業の扱いとなり、大尉に任官した四二年一月、航空技術情報部隊に配属された。航空技術情報部隊の初代隊長に任命されたのだった。のち、彼は陸軍少将にまで昇進して退役している。

ちなみに同名の陸軍軍人「フランク・ロス・マッコイ」がいる。この人も最終階級は少将だが、一八七四年にペンシルベニア州ルイスタウンで生まれている。一八九八年の米西戦争（アメリカ対スペイン帝国）、第一次大戦に従軍したほか、一九二三年九月に発生した関東大震災の救援作戦の指揮を執り、リットン調査団のアメリカ代表、極東委員会議長を務めるなど日本とも縁が深い。

同部隊の任務は、太平洋の島々で捕獲された日本軍の航空機の残骸を調べ、捕虜になった搭乗員にインタビューすることだった。まず彼は日本軍の航空機を型式に分類し、それぞれに短いコードネームを付けた。そうすることで最

前線の将兵は敵機を見分け、後方部隊に適正な情報を発信しやすくなる。

零戦は「ジーク」と呼ばれるようになった。

最初のころ、アメリカ軍に若干の混乱が生じた。フランク・マッコイが「ジーク」と名付けた戦闘機とよく似た、しかし翼の形状や機体の大きさが異なる戦闘機が目撃情報が各戦線から次々に寄せられたためだった。

そこで彼は、戦場で撮影された日本軍航空機の写真を詳細に調べ、分類する作業を行わなければならなかった。同じ機体であっても、迷彩の塗装や目撃した角度によって全く別の機種に見えることがある。

その結果、マッコイは「ジーク」が用途に応じて様々に改良・改造されていること、搭載するエンジンも異なっていることを解明した。陸上基地から飛び立つ場合は翼は長く、三十キロ爆弾ばかりでなく魚雷を懸垂できるように改良されていた。

対して空母艦載用に翼の端を切り落としていたモデルもあった。あるいは速度を重視するモデル、積載爆弾を重視するモデルなどがあつた。さらに年式によって微妙に形状が異なつた。

同じ零戦であつても、九百四十馬力の栄十二型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「二一型」と、一千百三十馬

力の栄二十一型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「三二型」では、翼の長さが一メートルも違つていた。マッコイが「ジーク」と名付けたのは四三年四月に実戦配備された千百三十馬力の「五二型」だった。

次に彼がしたことは、太平洋の島々で捕獲した零戦の残骸をかき集めて、飛行が可能な機体を復元することだった。このためにマッカーサーは、太平洋に展開する全アメリカ軍に、日本軍航空機の残骸を発見したときどう対処すべきか、厳しい規律を傳達している。

発見された機体の残骸は専用の小型空母でブリスベーン空軍基地に輸送された。そこで復元したのち日の丸が塗りつぶされ、アメリカ軍機であることを示す星のマークが付けられた。

星のマークが付いた零戦は実際にアメリカ本土の空を飛んだ。一九四二年三月に復元機はアメリカ陸軍の戦闘機「P-40」や「P-38」と擬似戦闘を行った。こうした作業を通じて、零戦は次第にその性能や弱点が解明されていった。

同じころ、アリューシャン列島のアラスカに近いアクタオン島で、アメリカ軍にとつては奇跡的に幸運な、日本軍にとつては決定的に不都合な発見があつた。ほとんど無傷の零戦が発見されたのだ。それはアクタン島の浜辺の泥湿地

に、車輪を空に向け、仰向けになっていた。

カリフォルニア州サンディエゴ基地に搬送されたのは八月十二日である。

戦後になってこの機は、一九四二年六月四日、アリユーシャン諸島ウナラスカ島のアメリカ軍港ダッチハーバーの攻撃に、空母「龍驤」から飛び立った古賀忠義という一飛曹が操縦していた「零式艦上戦闘機二一型」ということが判明した。発見された鳥の名にちなんで「アクタン・ゼロ」もしくは古賀飛曹の名にちなんで「コガのゼロ」と称される。

古賀一飛曹は対空砲射で被弾し、味方の潜水艦が救助にくるようになっていた不時着予定地に向かった。アクタン鳥がその指定地だった。ところが彼の零戦は着陸したとき、深い泥湿地に脚を取られ、もんどりうって反転して停止した。

このとき古賀一飛曹は首の骨を折って死亡してしまった。不時着した場合、日本軍は機体に火を放ち、場合によっては自決するよう、搭乗員たちを指導していたが、当人が死亡してしまったのでは機体の処分ができるはずがなかった。

日本軍はその後、古賀機の搜索が続けたが、濃霧のため発見できなかった。これをアメリカ海軍の哨戒機PB Yカタリナが偶然に発見した。不時着から三十六日後のことだ

った。これでアメリカ軍は完全な状態の零戦を確保し、その強さの理由と弱点を徹底的に解明していくことになる。

零戦の復元という大仕事を果たしたマッコイ大尉は、次いで四三年の夏に日本陸軍の隼も復元したが、もう一つ、もっと重要な仕事を果たした。

捕獲した日本軍航空機の残骸に刻印されている記号や数字を収集し、そこに潜んでいる意味を読み取るうとしたのである。彼は捕獲した残骸から得られた記号や数字を、サンフランシスコ市に本部を置いていた太平洋地域統括情報センター（JICPOA）に送った。

JICPOAはそうして得られた情報をIBM 405にかけ、暗号を解読すると同じ要領で詳細に分類・集計した。その結果、エンジンに付けられている番号と機体に装着されているプレートの番号などから、零戦の生産機数を型式ごとに推定できるようになっていく。

例えばJICPOAは、機体に付いていた番号から「ジーク」の生産拠点を割り出すことに成功した。「M」は三菱重工業、「N」は中島飛行機、「A」は愛知航空機、「K」は川島航空機、「W」は九州航空機、「Y」は航空技術廠、「P」は日本飛行機といった具合だった。

またJICPOAは一九四二年における零戦の生産機数を、粗鋼や部品の供給能力などを勘案して

一月…七五  
二月…七八  
三月…七八  
四月…八一

と推定した。

戦争が終わって、G H Q 戦略爆撃調査団に対して三菱重工業と中島飛行機が明らかにした実際の生産機数は、

一月…七九 (推定値との差…四)  
二月…八〇 (同二)  
三月…九〇 (同十二)  
四月…八五 (同四)

だった。

四か月間の総生産機数は実数三百三十四機、J I C P O A の推定値は三百十二機で、二十二機しか変わらない。墜落した機体からの推測とはいえ、これはもう「誤差の範疇」といっている。



## 補注

太平洋戦争「最初の一発」 日本時間の十二月八日午前零時を期して、マレー攻略のために編成された第二十五軍(司令官・山下奉文)の第五師団がマレー半島のシンゴラ、バター、コタバルの三か所に上陸した。シンゴラ、バターは無血上陸を果たしたが、コタバルでは戦闘が行われた。

コタバルに上陸したのは第五師団所属の第二十三旅団陀美支隊五千三百人だった。沖合いから近づく上陸用舟艇(ダイハツ)のエンジン音が気がついたコタバル航空基地の守備についていたインド軍第八旅団のドグラス大隊は、日本兵が上陸を開始するのを待って引き金を引いた。これが太平洋戦争「最初の一発」となった。日本軍による真珠湾奇襲攻撃より一時間二十分早かった。

クアンタン Kuantan…シンガポール北方、マレー半島東海岸の浜辺で現在は観光地になっている。地名は十五世紀のキリスト教布教者クアンタン・ヴァン・デーン・ボリストによる。

戦闘機「バッファロー」 制式採用後の名称は「ブリュースター/F2A バッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様(単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット)に沿ってブリュースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、ブリュースター社が受注に成功した。航続距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ/時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千メートルだった。実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

一九四一年九月十九日 零式戦闘機が実戦に投入されたのは一九四一年九月十三日で、この直後に中国軍の対空砲火で一機が撃墜されている。フリーマンの記録はそのとき撃墜された零戦を調査したものであった。しかし巡航速度や機銃の口径などに誤認がある。

戦艦「ビスマルク」 第二次世界大戦におけるナチス・ドイツ海軍の軍艦。一九四〇年八月二十四日に就役し、四一年五月二十七日イギリス海軍潜水艦の魚雷と自沈用爆薬によって沈没した。五月二十四日のイギリス艦隊との砲撃戦は勝利したが、二十六日イギリス空母アーク・ロイヤル艦載機との戦いで浸水、舵が動かなくなり速度は最大七ノットと動きが取れなくなった。二十七日朝、イギリス海軍の戦艦キング・ジョージV世、戦艦ロドニーなどの砲撃戦で「浮かぶ廢墟」となった。

アメリカ海軍の新造艦 日米開戦のちアメリカ合衆国が新たに建造した戦艦は八隻、重巡洋艦は四隻なのに、航空母艦は七隻、軽空母は九隻、護衛空母は二十九隻である。また新造艦のうち駆逐艦が二百七隻、護衛駆逐艦が百九十九隻、潜水艦が八十八隻というのは、空母+駆逐艦+潜水艦の組み合わせを軸に艦隊を編成するようになったことを示している。海軍の戦いが大きく変わりつつあった。

戦闘機「P-36」 もと「カーチス・ホーク75」と呼ばれ、初期モデルは翼に機銃を装備していなかった。のち両翼に七・六二ミリ機銃各一基を装備し、「P-36C」の名で制式採用された。太平洋戦争勃発時にはすでに時代遅れとなりかけていたが、真珠湾に襲撃した日本海軍攻撃隊に対して唯一の反撃を行い、九七式艦上攻撃機二機を撃墜している。

サッチ・ウイブ この戦法を最初に考案したのはフライング・

タイガースのクレア・シェンノート准将(1893~1958)だったといわれる。空母「サラトガ」配属の航空隊司令だったジョン・S・サッチ少佐(1905~1981)と僚機を操縦していたオヘア大尉はシェンノート准将の助言に工夫を加え海洋上での戦闘諸要素を加味して改良した。彼の名を取ってこの戦法は「サッチ・ウィーブ」と呼ばれた。

サッチ少佐はのち海軍少将に、オヘア大尉は少佐にそれぞれ昇進したが、オヘア少佐は戦闘で行方不明になった。シカゴ・オヘア空港の名は彼にちなんでいる。アメリカの戦闘機は重く頑丈だったため、急降下だけは零戦に負けなかった。

**赤松貞明** あかまつ・さだあき/1900~1980。中国戦線で活躍した古豪で、撃墜機数をカウントする習慣がなかったため正確な数は分からない。当人の申告によると三百五十機以上という。第二次大戦後は酒におぼれ、かつての戦友、僚友に借金を繰り返す生活だったといわれる。

**武藤金義** むとう・かねよし/1916~1945。愛知県に生まれ日米開戦時は第三航空隊でフィリピン航空戦、ジャワ島攻略など初期の作戦に参加した。のち横須賀航空基地で教員になる。カダルカナル戦に伴いラバウルに進出し撃墜王となった。四五年七月二十四日豊後水道上空の空中戦で撃墜され戦死した。死後特進して少尉。「大空の武蔵」の異名を持つ。

**岩本徹三** いわもと・てつぞう/1916~1955。九六式戦闘機に乗り中国戦線で数機を撃墜したのを皮切りに、四一年十二月八日の真珠湾攻撃には空母「瑞鶴」の航空部隊で参戦、四二年四月にはインド洋、五月には珊瑚海海戦と転戦した。のち大村航空隊、横須賀航空隊の教員任務に就き四三年十一月戦場に復帰し

ソロモン方面転出を経てラバウル航空隊で活躍した。四四年二月ラバウルから撤収しトラック島、木更津、岩国、国分基地と転戦し、岩国基地で終戦を迎えた。自身の記録によると撃墜数は二百二機にのぼるといふ。

**杉田庄一**すぎた・しょういち/1925~1945。新潟県に生まれ四二年十月ラバウル航空隊に所属し四三年四月山本五十六司令長官座乗の一式陸攻を護衛した零戦六機の一だった。四三年八月戦闘で重傷を負い内地に送還されたのちマリアナ諸島方面、フィリピン方面を転戦して内地に帰還。四五年四月戦死した。撃墜数は七十機とされる。

**西澤廣義**にしざわ・ひろよし/1920~1944。長野県に生まれ地元の実業工場に勤務していたとき徴兵となり横須賀航空隊に入った。四一年千歳基地勤務ののち四二年ラバウル航空隊に配属され、坂井三郎、大田敏夫と編隊を組んだ。四四年航空機受領のため輸送機で移動中、撃墜され戦死した。百二十機の撃墜が記録されている。

**坂井三郎**さかい・さぶろう/1916~2000。一九三八年中国戦線で九六式艦上戦闘機部隊に配属され試験飛行間もない零戦で戦果をあげた。日米開戦とともにフィリピン攻撃に参加、のちラバウル航空隊で撃墜王となったが四二年七月戦闘で重傷を負い内地に送還され飛行教官となった。四四年硫黄島に赴き空中戦でアメリカ軍攻撃機を撃墜。さらにポツダム宣言無条件受諾後の四五年八月十七日、横須賀上空に飛来したアメリカ軍爆撃機を撃墜している。大日本帝国海軍航空機最後の戦いを演じたことと知られる。

撃墜した連合国軍航空機は六十四機とされるが、列機を損失し

なかつたこと、搭乗機を一度も不時着なく無事着陸させたことなど名パイロットとして多くの逸話を残している。第二次大戦後は日本通運に勤務したのち印刷業を開くかわらアメリカ空軍などに招かれ講演や著述を行った。著書『天空のサムライ』がある。

笹井醇一 ささい・じゅんいち／1918～1942。東京に生まれ四一年海軍兵学校を出て台湾の台南航空隊に配属され小園安名の下で航空機操縦の特訓を受けた。日米開戦と同時にフィリピン攻撃に参加し、以後、ボルネオ、スラバヤ、ジャワを転戦し四年ラバウルに進出。同年八月二十六日ガダルカナル島上空で撃墜され戦死した。撃墜した連合国軍航空機は五十七機以上とされる。二階級特進して少佐。

太田敏夫 おおた・としお／1919～1924。「利夫」と記す資料もある。西澤廣義、坂井三郎とともに「ラバウル三羽鳥」の異名を取った。撃墜数は三十四機と説と五十機とする説がある。日本の撃墜王たちについて撃墜機数が曖昧なのは、日本海軍が個人の戦果を評価しなかったことよってである。

戦闘機「P-51 ムスタング」 ナチス・ドイツ空軍に劣勢を強いられたイギリス政府がスピットファイアに代わる主力戦闘機の開発をアメリカ政府に依頼し、ノース・アメリカン社が四か月弱で開発した。機体は流線型で、最高速度は七〇三キロ／時、航続距離は千五百三十キロだった。アメリカ軍は太平洋戦線で零戦に對抗するため改良を重ね、ついに零戦を圧倒した。

余談だが日本も零戦の後継機として高速・高高度での戦闘が可能な局地戦闘機「飛燕」を開発した。この機影がちよっと見るとムスタングと類似していた。このためアメリカ軍機が味方機と誤認したケースも多々あったらしい。

日本軍機の通称 「ジーク」と同様に、九七式艦上攻撃機は「ケイト」、九六式陸上攻撃機は「ネル」、一式陸上攻撃機は「ベティ」、隼は「オスカー」、九七式重爆撃機は「サリー」、重爆撃機「呑竜」は「ヘレン」と名づけられた。戦闘機は男性名、攻撃機や爆撃機は女性名で呼びやすい名前を付けることによって、戦場の兵士たちは日本軍機を識別しやすくなった。

## 063 戦場の計算機

第六十三

戦場の計算機

一

アメリカ極東軍のフイリピン防衛軍が、コレヒドール要塞に放置した「IBM405」の話である。

鹵獲した日本陸軍第十四軍は、それが何なのか理解できなかった。そこで東京の大本営に処分を問い合わせると、

「大至急、本国に輸送すべし」

という回答が返ってきた。ただし、

「精密な機械なので、丁寧に扱え」

と付け加えるのを忘れた。

ただ、第十四軍司令官の本間雅晴中将はイギリス滞在の経験もあったので、それがパンチカード式計算機械装置ではないかと思っていた。そこで要塞から丁寧に運び出すとトラックに載せ、スラバヤ湾まで運んだ。

そこからは海軍の仕事だった。

彼らは十分な認識がなかったし、特別な注意もなかったので、「やけに重い機械」としてしか扱わなかった。

海軍は駆逐艦の甲板に計算機を固定して搬送した。このため「IBM405」は汐風と直射日光にさらされ続けた。東京・目黒の海軍研究所に届いたときは全体が赤錆に覆われ、どうにも動かなかった。

そこで日本ワットソン統計会計機械の元社長であり、日本を代表する計算機技術者と目された水品浩に修理が命じられた。修理が行われたのは三重県鳥羽にあった神戸製鋼の工場である。

なぜ東京から鳥羽に回送されたのかを説明するには、ドウリットル部隊による東京初空襲のことに触れなければならない。

太平洋戦争が始まったとき、アメリカ海軍の作戦本部が最も懸念したのは、ハワイの航空基地が日本軍に奪われ、アメリカ本土への空襲が行われることだった。

アメリカ海軍作戦参謀にフランシス・ローという大佐がいた。

——日本も同じではないか。

と彼は考えた。

このときルーズベルト大統領の名で、

——緒戦で圧倒され続けている連合国軍を奮立たせる作戦はないか。

ということが作戦本部に諮問されていた。

——ジャップを怯えさせてやれ。

彼は東京を空襲することを考えた。

ただちに計画案が策定された。東京から五百マイル離れた海上まで、爆撃機を空母で運ぶ。そこから爆撃機を発進させ、日本上空を通過して中国に着陸する、というのである。

航続距離二千マイル（三千二百キロ）を誇る双発の軽爆撃機 B-25 があつた。

計画案が上層部に報告され、

——やつてみよう。

ということになった。

通常、こういう無茶な計画は立案されること自体がない。

航空母艦は機体が軽く滑走距離が短い戦闘機や急降下爆撃機を前提に設計されている。艦上戦闘機の自重は七百キロ、それに対して B-25 は二トンを上回る。空母の甲板から飛び出したとたん、海中に墜落するであろう。

そこでロー大佐は

——特別攻撃用に機体の重量を落とせ。

と命令した。

白羽の矢が立ったのは第十七爆撃連隊のジェームズ・ドゥリットル中佐である。

当時、アメリカ海軍航空部隊で統率力、作戦遂行能力ともナンバーワンとされていた。そのドゥリットルを隊長に二百人の要員（志願兵）が選ばれた。

彼らは最初、空母の甲板に見立てた狭くて短かい滑走路で離陸することを練習し、次に空母からの発艦訓練が行われた。日本を飛び越えて中国大陸に着陸するのだから、着艦訓練は必要なかった。

一九四二年の四月二日、ドゥリットル隊と十六機の B-25 を載せた空母「ホーネット」はサンフランシスコ港を出港し、北太平洋上でハワイから来た「エンタープライズ」と合流した。

エンタープライズには太平洋艦隊第十六機動部隊司令官 ウィリアム・ハルゼー（中将）が乗り組んでいた。巡洋艦四隻と駆逐艦六隻に警護された二隻の空母が東京から五百マイルの海洋上で停止したのは四月十八日だった。

計画では、東京上空に達するのは深夜ということだった。白昼堂々では高射砲に撃墜されてしまふであろう。

ところが日本の哨戒艇に発見された。その船はそもそもは漁船だったが、日本海軍に徴用された「黒潮部隊」に属する警戒艇であつて、アメリカ海軍巡洋艦「ナッシュビル」がただちに砲撃してこれを撃沈した。

日本の警戒艇が果たして空襲警報を発信したかどうかは

分からなかった。一瞬の迷いがあった。

だがハルゼーが「Go!」の決断した。

こうして東京に向けて発艦した十六機のB-25は、同日午後零時に東京、川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸などを空襲して中国に飛び去った。

『機密戦争日誌』一九四二年四月十八日付

絶好の快晴下に午後〇時三十分頃、突如帝都空襲を行う。焼夷弾のみ。国民をして初めて大東亜戦争の渦中に入らしめた如き感を抱かしめたり。昨年本日は日米交渉開始の飛電ありで、上層部を驚かしむ。本日は帝都空襲せられて上下驚愕す。

作家・伊藤整はその日記にこう書いた。

初めての本当の空襲であるが、晴れて明るい日のこととて、のん気である。あの飛行機が敵機というのだそうだが、ふだんの日本の飛行機を見るのと変らない気持。今まで受け身ばかりいたアメリカ人も初めて少しは仕事らしいことをしたと、ほめてやりたい位の気持ちである。昼間の東京に入って来るなど、なかなかやるわい、といかにも冒険好きなアメリカ青年の顔が目には浮かぶやうだ。

——ほめてやりたい。

——なかなかやるわい。

実際はそれどころでなかった。

無防備の上空五百メートルから投下された爆弾と焼夷弾、機銃掃射によつて、東京では死者三十六人（六都市合計五十人）、重軽傷約五百人、焼失・全壊家屋二百六十五戸、軍事施設や工場など数か所が損壊した。

これに対して日本軍は、たまたま試験飛行中だった陸軍三式戦闘機「飛燕」が一連射撃を行ったものの、燃料切れで一機も捕捉することができなかった。

## 二

日本軍は総攻撃をかけた占領を宣言するのに、日本の記念日や皇族の誕生日、過去の戦争にちなんだ月日を選んだ。それと同じように、アメリカ軍もまた、日米外交交渉開始の日を選んで日本本土への初空襲を実施したわけだった。

それはともかく、アメリカの爆撃機が爆弾を落としたということは、横浜や川崎、千葉も安全ではないことを意味していた。陸軍兵器行政本部や電気試験所は鹵獲した「I

BM405」を動かして役立てようと考えたので、東京から鳥羽に回航したわけだった。

では、なぜコレヒドール要塞にIBM社のパンチカード式計算機械装置があつたか、である。

話は日米開戦の前にさかのぼる。

ナチス・ドイツ軍がイギリス空爆を開始した一九四〇年の七月、IBM社会長のトーマス・ワトソンは、連邦政府に対して思い切った提案をした。

その内容は、

一、連合国軍に対して、当社が保有するすべての施設を提供する。

二、アメリカ政府が調達する軍用資材の納入に当たっては、1%の利益で満足する。

三、戦争に勝った暁には、枢軸国側に接収されているIBM社の資産を可及的速やかに回収し、開戦前の状況に復することを優先してほしい。

というものだった。

このときIBM社が海外に展開していた事業所は、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、シンガポールなど七十七か国に及んでいた。その中には当面の敵であ

るナチス・ドイツ、イタリア、日本も含まれていたが、ルーズベルト大統領にとってこの提案は心強いものだった。ルーズベルトはワトソンの提案を了解した。

さらにワトソンは「陸海空三軍の前線基地に、当社の計算機を配置してどうか」と提案した。その運用と保守に、自社の社員を充てる、というのである。

合衆国政府は補給の効率化と補給物資の最適化を目指していたため、ワトソンの提案は持つてこいだった。しかも戦争の現場である前線に計算機を持ち込むという発想は、なるほど奇想天外だった。

敵に奪われたら……、壊れたら……などということ、連邦政府は考えなかつた。

——補充すればいいだけのことではないか。

これを受けて連邦政府は、三軍の方面軍司令部ごとにMRC（マシン・レコード・センター）、前線部隊にMRU（マシン・レコード・ユニット）を配備することを決め、IBMマシンと自家発電装置を搭載できる専用トレーラーを開発した。

このあたりが生産力の違いというものである。

トレーラーに計算機一式を乗せて、前線で計算機を動かすという発想は、従来の戦法にまったくなかつた。計算機は一発も弾を撃ちださないが、膨大な物資を効率よく、最



適に配置する「補給」という重大な戦略を担うのだ。あるいは傍受した敵の電信を解析することもできる。

もう一つの計算機メーカーであるレミントンランド社は、機関銃や大型火砲、増産に向けた農機具などの生産に追われていた。これに対してIBM社が作っていたのは商業用の秤だったり、タイムレコーダーだったりした。

およそ軍需と縁のない製品ばかりで、ワトソンは経営者として、なんととしても計算機を軍需と結びつける必要があった。

ワトソンは「計算機に賭ける」という決意をしていたのである。

### 三

クレア・レイクとフレッド・キャロルという卓越したエンジニアが、IBM社の統計会計機械装置を磨き上げたこととはすでに書いた。実はもう一人、スコットランド生まれのジェームス・ブライスというエンジニアがいた。

ハーバード大学を中退してIBM社に入り、新型の計数器、乗算器、除算器を生み出した。ブライスはそれまでの機械仕掛けの統計会計機械装置から「プログラム」を分離することに成功した。

計算処理をする度に配電盤の配線を変更するワイヤリングの作業が簡易になった。彼は統計会計機械装置を汎用のパンチカード・システム（PCS）に育てる仕事をした。

ブライスは並行して真空管に着目し、統計会計機械装置に使えないか、と考えた。地道な研究を重ねた結果、一九三二年に真空管を使って演算を行う手法の開発に着手していった。

日米開戦の四年前、一九三七年、一人の青年がそのブライスを訪ねてきた。

青年の名はハワード・エイケンといった。ハーバード大学大学院生である。

エイケンは独自に編み出した自動計算機械の構想を説明した。それは物理計算を行うための仕組みで、既存のどのような計算機械装置とも異なる新しい技術体系——のちに「アーキテクチャ」と呼ばれるもの——を意味していた。

ブライスはクレア・レイク、フレッド・キャロルなどと相談し、これは行ける、という確信を持った。ただちにワトソンにレポートが回付され、ワトソンが即決した。IBM社が世界に誇るエンジニアが太鼓判を押ししているのである。

一九三九年の春から夏にかけて、IBM社はハーバード大学と共同で新しいアーキテクチャの研究開発を行うこと

を決めた。計算機的设计と開発はクレア・レイクを中心に、IBM社のエンディコット研究所の技術者グループが担当し、エイケンにプロジェクト・チームを任せることになった。

プロジェクトでは演算素子にはリレーが採用され、プログラムは紙テープで供給された。物理方程式を毎秒三回の速度で演算した。三年後に完成したマシンは、長さが十五・五メートル、高さが二・五メートル、部品点数は七十五万個という巨大なものだった。

大きさだけ見れば大型の蒸気機関車に等しい。のちにこのマシンには「ASCC」(Automatic Sequence Controlled Calculator)。強くて訳せば「電動機械式自動計算機」の名が与えられることになる。

ASCCは一九四三年一月に試運転が開始され、翌年五月、「ハーバード・マークI」の名で正式に公表された。IBM社は次期製品に必要な技術を手に入れたのだ。

政府と軍がIBM社の計算機を標準的に採用したのは、操作を同一にすることで要員の養成・確保を容易にできること、MRCやMRUの間でデータやプログラム(パンチカードと配電盤)および、要員の融通が利くこと、IBM社の保守要員がどんな場所でもサポートできる——などが

理由だった。IBM社が一貫して通してきたレンタル制で蓄積したノウハウが役立つ。

これによりアメリカ軍は対ナチス・ドイツ、対日本の両面戦争に臨んで、兵員、輜重、弾薬、医薬品、食料、機器・備品などの輸送と在庫管理を常に的確に行うことができるようになった。前線からの要求と本部からの供給を最適化し、国内における軍需物資の生産を調整することができたし、また暗号の解析や作戦の立案などにもIBM社の計算機を適用した。

納入価格の1%という利益は、名目に過ぎなかった。IBM社は第二次大戦そのものでは大きな利益をあげることができなかったが、計算機のデファクト・スタンダードの地位を獲得することができた。「世界のコンピュータ市場の七割」といわれたIBM社のシェアは、ワトソンの捨て身の策略——ギャンブル、という人もいる——によって可能になった。

前線基地に計算機を配置する戦略は、欧州と太平洋での二面作戦を優位に転換するのに役立った。何よりも物資と兵器、兵員の補充が的確かつ円滑に実施できた。太平洋戦争は兵站の戦いでもあった。

と同時に計数化と理論をどう適用するかの戦いでもあった。それは作戦だけでなく、要員の評価にも使われた。

例えば、ある部隊の指揮官に欠員が生じた場合、司令部は部隊を維持し、指揮命令を実行するのに必要なスキル、ノウハウ、年齢、位階を方面司令部に伝達する。すると方面司令部では、数万人の尉官、佐官の中から、最適な人材を抽出して送り込んでくる。

これは兵器、武器、弾薬、医療部隊、医薬品、治療器具、燃料などについても同様だった。

一九四二年七月から十二月にかけてアメリカの産業界が生産した主要な軍事物資は以下のものである。

- ・ 航空機 二万三千三十二機
- ・ M1カービン銃 十一万五千四百一十一挺
- ・ 一〇五ミリ砲弾 六百十萬九千発
- ・ 中型戦車 九千四百八十一台
- ・ トラック 三十三万三千五百十六台
- ・ 靴 下 二千四百三十五万一千足

こうした大量の物資を戦地に配給する輸送船の手配を、計算機が一手にこなした。このためにアメリカ軍は陸海空のそれぞれで、機材・機器、武器・装備などをコード化した。兵隊への給与、恩賞、部隊や指揮官の交代も計算機が打ち出し、適宜処理されていた。

日本軍がガダルカナル島の守備隊を支援するため、酒樽に米を詰めて海洋に浮かばせ、潮の流れに任せたとはいえ、元が違っていた。インパール作戦で、最前線に食糧を搬送する兵士たちが、背中に食糧を負いながら飢え死にするような出来事は、アメリカ軍では起こりえなかった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

フランスス・ロー Francis Stuart Low / 1894 ~ 1964。
新鋭空母「ホーネット」の最終機装工事の状況を視察するためノールフォーク海軍基地を訪れた。そのとき、空母の輪郭が描かれた飛行場の滑走路にキャリアの浅パイロットが離着陸の訓練を行っている光景と、その輪郭に対してアメリカ陸軍航空軍の爆撃機の編隊が攻撃演習を行っている光景を見た。ローはその光景から「航統距離の長い陸軍の双発爆撃機を空母から発進させたらどうだろうか」とひらめいたという。

ジェームズ・ドウィットル James "Jimmy" Harold Doolittle / 1896 ~ 1993。一九四二年、中佐のとき東京初空襲に成功し、その軍功で二階級昇進し、准将に昇進した。そののち北アフリカ戦線に司令官となつて赴任し、少将・戦略空軍司令官、四四年イギリス本土防衛のため中将・アメリカ第八空軍司令官となつた。
日本の哨戒艇

第二十三日東丸と長渡丸の二隻がそれぞれアメリカ艦隊を発見し、「敵艦隊見ユ」「敵ハ空母三、巡洋艦四ヲ伴フ」という至急電を計七通も発信していた。日東丸は巡洋艦の砲撃で沈没したが、アメリカ海軍はそのため一千発もの砲弾を発射した。

東京初空襲後のB-25 一機はソ連のウラジオストックに着陸し、四機は夜間着陸に失敗して大破した。残りの十一機は飛行場を発見できず搭乗員は落下傘で降下した。そのうち一機の搭乗員は中国共産党軍によつて六人が殺害され、二機は日本軍占領地に不時着／落下傘降下したために八人が捕虜となつた。ソ連領に着

陸したB-25はそのままソ連軍が接收し、分解して調査し、そつくりの爆撃機を開発した。

伊藤 整 いとう・せい / 1905 ~ 1969。本名も同じだが「整」は「ひとし」と読む。北海道松前郡白神村に生まれ、小樽高等商業校を出て市立小樽中学校の教師となつた。のち東京商科大学に入ったが中退して文筆活動に入り小説、文芸評論で活躍した。詩集『雪明りの路』、小説『生物祭』『街と村』『得能五郎の生活と意見』『鳴海仙吉』『氾濫』などがある。東京工業大学教授、日本近代文学館館長、日本ペンクラブ副会長、文芸家協会理事。六七年日本芸術院賞、六八年日本芸術院会員。死後勲三等瑞宝章。
戦闘機「飛燕」 ひえん・第二次大戦中、日本陸海軍機で唯一の液冷エンジンを装備した制式戦闘機で、流線型の機体特徴だった。ドイツのダイムラー・ベンツ製「DB601」エンジンを国産化し川崎飛行機が設計、生産した。制式名称は「キ-61」三式戦闘機で一九四四年一月に就役し前線配備された。翼幅十二メートル、全長八・七五メートル、最大速度は高度五千メートルで時速五百八十キロ、最高二万メートルまで上昇することができた。十二・七ミリ機銃二基、二十ミリ機関砲二門を備えており、B-29撃墜用だった。太平洋戦域をはじめ本土防空に威力を示した。

ハワード・エイケン Howard Aiken / 1900 ~ 1973。

IBM社と共同で開発した「MARK I」は約三千個の電磁リレーを用い、計算の手順が計算機の外にある制御板で指定されるものだった。このためMARK Iは「逐次型自動制御機械装置」と位置づけられている。

余談だが、エイケンは一々があなたのアイデアを盗むことを

気に病んではならない。もしあなたのアイデアに何か良いところがあるのだとすれば、それはそもそも人々に捧げられるべきものなのだ」という言葉を残している。優れた発明、技術は社会の公共財であるという考えを示したもので、現在のオープンソース・ソフトウェアの基本的な思想は彼によってかたちづくられた。

ASCC ハーバード大学の学長ジェームス・ブライアン・コナントは「マークI」について次のように述べている。

「この計算機の個々の構成要素には、IBM技術者達の一連の発明が生かされています。これまで、私達は基礎科学が産業にどのような恩恵をもたらしたかということについてはたびたび聞かされてきましたが、産業界の技術が科学にこれほどまでの恩恵をもたらしたという話は余り聞いたことがありません」(日本IBMホームページ「コンピュータ・ミュージアム」)

コレヒドール要塞 マッカーサー将軍の脱出

一九四二年の二月二十二日、ワシントンからコレヒドール要塞のマッカーサーに宛てて、脱出命令が到着した。オーストラリアで再起を圖れ、というのである。三月十日、マッカーサーはウェインライト少将を呼び、「私が帰ってきたときには、君を中将に昇進させよう」と言つて、全フィリピン軍司令官に任命した。

葉巻一箱と髭剃りクリーム二瓶を手渡したのは、饒別のつもりであったのかもしれない。マッカーサーが妻と息子、フィリピンのケソン大統領、サザランド参謀長、ロックウェル海軍少将など幕僚二十二人が魚雷艇四隻に分乗してコレヒドール島を離れたのは翌十一日である。

そもそもダグラス・マッカーサーという人物は、一九三七年十二月末日付で陸軍を退役し、年俸三万一千五百ドルでフィリピン

政府に軍事顧問として招かれていた。しかし対日戦の機運が高まったことから四一年七月に再び陸軍中将・極東軍司令官に任命され、開戦と同時に大将に昇進した。連邦政府は優秀な軍人をヨーロッパに振り向けたことと、現地の事情に詳しい現役将校がいなかったことによつていられる。

ある意味で太平洋戦争は、彼にとつて千載一遇のチャンスだった。生来、目立ちたがり屋だった彼は第一次大戦ではヘルメットを被ることなく、手には馬の鞭を持つて最前線の指揮に当たったという逸話がある。退役して悠々自適を決め込んでいたところ、にわかに関東軍司令官という大役が転がり込んできた。フィリピンで勇名を馳せ、英雄になれば、ひよつとするとアメリカ合衆国大統領への道が開けるかもしれない、とひそやかに考えた。その道を開くためには、十万人の兵士と避難民は重い足枷になる。

彼の盟友でよき助言者だったコートニー・ホイットニー准将も、脱出を勧めた。そのこともあつてマッカーサーは

——ここは逃げるに如かずである。と考えた。

織田信長、徳川家康がそうであつたように、名將は逃げるのがうまい。全軍の將が死すれば家が崩壊するのは、武田信玄、今川義元の例で分かるであろう。ただしマッカーサーの場合は違つていた。彼独りの問題でなく、連合軍に蔓延していた將軍たちの功利主義というものだった。

マッカーサーとその家族、極東軍司令部の幕僚たちを乗せた魚雷艇は、途中、日本軍の巡洋艦の数キロ鼻先を横切り、コレヒドール島脱出から二日目の三月十三日、ミンダナオ島にたどり着いた。ここで様子を見、十六日の深夜、迎えにきた二機のB-17爆

撃機でオーストラリアに飛び立った。

「アイ・シヤル・リターン」の名言はこのとき生まれた。

マッカーサーから体よく指揮を委ねられたウェインライトは、ただちに「四月十五日までに食糧の補給がなければ、降伏せざるを得ない」とワシントンに打電した。責任逃れの布石を打った、といえなくもない。

ここで要塞の内に問題が発生した。一つはアメリカ人とフィリピン人との間の人種的な確執だった。バターン半島の防衛線ではアメリカ軍の士官がフィリピン軍の兵を指揮していた。戦闘で斃れるのはフィリピン人が圧倒的に多かった。加えてフィリピン人一般市民をコレヒドール要塞に退避させることを、アメリカ軍が拒否したことから、対立の溝が深まった。

もう一つは戦意の低下だった。六万五千のフィリピン軍将兵は、マッカーサーと一緒にケソン大統領が脱出したことを知って衝撃を受けた。

064 真珠湾の次

第六十四

真珠湾の次

一

太平洋戦線でアメリカ軍は、第六十七節で紹介するランチェスター戦略モデルを忠実に実践した。戦争初期に採用したのは戦略モデルのうち「弱者の戦い方」だった。つまり局地戦にしほり、兵力の分散を避け、一点集中の戦略を練った。

太平洋は広大で、小さな島が無数に散在している。

その中に戦略的な重要拠点となる島があった。真珠湾で太平洋艦隊の戦力を半減させられたアメリカ軍は、戦略拠点を絞り込み、その他の島は日本軍のなすがままにまかせた。

もうちょつと視野を広げると、大局的な戦略のベースにはレインボー計画があった。そのうちの第五プラン（レーンボー5）では、ヨーロッパの対ナチス・ドイツ戦線を優先することになっていた。中国よりイギリス、フランスとの同盟関係の方がプライオリティが高かった。

そのために、対日包囲網の実質的な主体はイギリスとオランダということになった。合衆国艦隊司令長官（兼海軍作戦部長）アーネスト・キングは太平洋艦隊長官チェスター・ニミッツに、

——ABDA部隊には、全滅するまでに少しでも日本軍の進撃速度を遅らせることを期待する。
と語ったと伝えられる。

アジアはイギリス、オランダに任せる、というのである。そうせざるを得なかったのが実際だったが、ランチェスター戦略モデルという支えがなければ、アメリカ政府はアジアの戦いに引き込まれ、戦争初期に戦意を喪失していたかもしれない。

日本は、緒戦の連勝に酔っていた。東条英機はラジオで「皇軍は各地に転戦、連戦連勝、まことにご同慶の至りであります」

と語り、
「ご同慶の至り」

が流行語になった。

ところが実態はというと、開戦早々から日本軍では物資の生産・調達と輸送、つまり補給の問題が生じていた。これがために、戦争の長期化によって、戦略と戦術を大幅に修正せざるを得なくなった。

そもそもこの戦争は、鉱物資源や工業生産力の限界を開くために、日本が全身をハリネズミのようにして始めた戦いだつたから、戦争は短期間に終結させなければならなかつた。

一九四〇年七月、陸軍航空総監（兼陸軍航空本部長）に就任した山下奉文は、遣独視察団の団長としてナチス・ドイツを視察してリーダーや暗号生成装置、パンチカード式集計分類計算機械の重要性に気がついた。メッサーシュミット社を訪問したとき、部品管理にパンチカード式計算機を使っているのを見た話はずでに書いた。

帰国後に彼は、近代戦争は軍事力より産業力、技術力が決め手になるという報告書を首相・東条に提出した。しかし東条は山下を二・二六青年将校の一派と疎んじていたこともあって、新京（長春）に追いやってしまった。

山下は独断で日本ワットソン統計会計機械にパンチカード式計算機械装置を発注していたが、アメリカ合衆国政府が対日輸出規制（道義的対日禁輸）をかけていたために、それは実現することがなかつた。

連合艦隊司令長官・山本五十六もアメリカの工業力、特に自動車産業を重視した。それゆえに対米戦争は回避するのが善策、避けられないとしてもできるだけ先延ばしにするのが改善の策と考えていた。

しかし彼は、その一方で「軍人は政治に口を挟むべきではない」と頑なに信じていた。軍人としての美学を優先させた彼は、表立って対米開戦に異論を唱えることをしなかつた。

開戦前の秘話として伝えられるのは、

——開戦することが決まったあとに開かれた大本営での会議で、山本五十六は「一両年は存分に戦ってお見せする。しかし、そのあとは保証しかねる」と言つた

というエピソードである。

ときにそれは

——山本五十六は戦争に反対だつた。

と解釈されるのだが、それは間違っている。

軍人であれば、戦争というものを否定することはない。戦うと決まったからには、いかに短時間に、いかに少ない犠牲で勝利を収めるかを考えるのが指揮官の仕事である。

山本がごく親しい友人に

「一気にアメリカ本土に兵を進めてはどうか」

と漏らしたのは、ギリ貧に陥ることを危惧したからだつた。仮にアメリカ本土での戦いには敗れるにせよ、そこで講和交渉に入ることができる。この考え方は「強者の戦い方」の原則に合っている。

山本の構想は、「ミッドウェー海戦」と呼ばれる艦隊決

戦の延長線上にあった。一九四二年六月五日に行われたこの海戦は、太平洋戦争の趨勢を左右したとされる。すなわち連合艦隊は主力空母四隻を失って制海権を明け渡した。

それは紛れもない事実だが、南雲機動部隊の後に陸海軍の陸戦隊約五千人を乗せた輸送船団が連なっていたことはあまり知られていない。作戦の通りアメリカ太平洋艦隊を撃滅できていたら、連合艦隊はミッドウェー島に陸戦隊を上陸させ、ここをハワイ島攻略、さらにアメリカ本土空爆の起点とする計画だった。

二

現地時間一九四一年十二月七日午前七時五十二分、第一次攻撃隊指揮官・淵田美津雄坐乗機が発信した「ト・ト」電で始まった真珠湾奇襲攻撃のあと、アメリカでは——日本が上陸してくるかもしれない。

と真剣に心配した。

実際、日本軍はアメリカ本土攻撃を実行に移していた。

大本営が立案したアメリカ本土攻撃は、日米開戦直後、伊号潜水艦九隻による通商妨害（貨物船やタンカーを魚雷や搭載砲で破壊・沈没させる）に始まり、四二年二月二十三日、エルウッド製油所に砲撃が行われた。

その四日前（二月十九日）、オーストラリアのダーウィン港が空襲され、停泊していたアメリカとオーストラリアの艦船と商船が沈没・破壊されていた。

いつ、どこからやってくるか……

いやがおうにも不安が高まっていた。

二十四日の深夜二時過ぎ、陸軍基地のレーダーがロサンゼルス（西百二十マイル（二百キロ））の上空に、不審な飛行物体を検出した。

次いでロングビーチの上空に飛行機が目撃され、数分後、——ロサンゼルス上空一万二千フィートに敵攻撃機二十

五。が報告された。

陸軍基地が警報を発し、灯火管制が敷かれ、迎撃のための戦闘機が準備され、砲撃が行われた。闇夜にサーチライトが交錯し、砲弾千四百発以上は射ち出された。射撃は午前四時過ぎまで続けられ、七時過ぎに灯火管制が解除された。

海軍長官フランクリン・ノックスは二十五日、

——不安から発生した誤報だろう。

と述べ、二十六日に陸軍参謀長ジョージ・マーシャルはルーズベルト大統領に

——当時活動していたアメリカの陸海軍航空機は存在せ

ず、関係した航空機は十五機に及ぶようだが、爆弾は全く落とされなかったし、未確認航空機は一機も撃墜されなかった。

と報告した。

のち「ロサンゼルスの戦い」と称される。

この冗談のような怯えぶりを知ったなら、山本五十六は

——もっと早く上陸作戦を執行しておけばよかった。

と口惜しんだかもしれない。

西海岸の防衛陣が水平線の向こうに双眼鏡を向けて目を

凝らしていたころ、ホノルルでは

「二月十一日に日本軍がハワイに上陸する」

という憶測が、まことしやかに流れていた。

二月十一日と具体的だったのは、それが日本の「紀元節」に当たっていたためである。何かの記念日に日本軍が行動を起こすのは周知の事実だった。

判明しているだけで十二月十七日、年が明けた一月五日と日本軍の偵察機がオアフ島上空に飛来して偵察を行っていたので、ハワイ駐留軍は日本軍の動きに最大限の注意を払っていた。ばかりでなく、ハワイ在住の日系人をアメリカ本土西海岸の収容所に隔離するようなこともした。

内乱を怖れたのである。

四二年の二月十一日は何ごともなく過ぎたが、アメリカ政府と軍関係者が恐れた憶測は、半ば当たっていた。連合艦隊は第二次ハワイ攻撃を計画し、実行に移していた。

その計画は「K作戦」といった。

数度の偵察で、連合艦隊はアメリカ軍が真珠湾に着底した艦船を引き揚げ、破壊された港湾施設を修理しているのを知った。灯火管制もかけず大車輪で取り組んでいたもので、あと二か月もしたら軍港として再生するかもしれない。

そこで航空母艦に搭載した複葉式の九六式艦上攻撃機をもつて、アメリカ軍の陸上基地を破壊し、港湾の修復工事に打撃を与え、沈没したままのアメリカ海軍艦船を修理不能なまでに壊滅させるという計画が作られた。

九六式艦上攻撃機は本体が布張りで最高速度は三百キロという時代遅れの戦闘機である。であればこそレーダーに補足され難いのだが、航続距離を考えるとハワイ近海まで空母を動員しなければならなかった。空母はいずれの決戦に備えて温存したいし、九六式艦攻は対空砲火に狙われやすい。

そこで使用する航空機は、海上で発進できる水上飛行艇がいい、ということになった。マーシャル群島ウオツジェ環礁から発艦させるのだが、用意できたのは二機の二式大艇だった。搭載できる爆弾は一機当たり二百五十キロでし

かない。

四一年十二月八日に連合艦隊が投入した航空機は三百機超、空母六隻、戦艦・重巡洋艦・駆逐艦など十四、特殊潜航艇五だった。これに比べ、「第二次」といいながら二式大艇がたった二機というのは、

——偵察のついでに過ぎない。

言葉だけが大げさになり、実態は情けないほどの作戦だった。

この「攻撃」は折からの悪天候に阻まれた。

厚い雲が低く垂れ込めていたため、飛び立った二機の飛行艇は目標を捕捉することができなかつた。ドウリットル部隊のように上空五百メートルまで高度を下げなかつたのは、搭乗員たちの士気が後ろ向きになっていたことと、帰還して報告することが義務付けられていたためである。

——この天候では爆撃は無理。

と判断した二機は、帰還のために急いで爆弾を投下した。

一発はハワイ諸島モロカイ島付近の海上に落ちて巨大な瀑布を生んだが、人の眼に触れることがなかつた。もう一発はマウイ島の人家近くに落下して火災を起こした。

伸るか反るかの大博打に打って出た以上とことんやるほかないのだが、慎重に過ぎるのは及び腰という表現が似合っ

ている。

三

日本軍の第二次ハワイ爆撃と本土砲撃は、せいぜい東京初空襲への腹いせという程度で、戦略的な意味はほとんどなかつた。

——なぜ失敗に終わったか。

が海軍作戦本部で検討された。

結論は

——航空母艦の出撃が制約されたためである。

だった。

——しからばハワイ諸島を射程距離に置くどこか島の上に海軍の航空基地を持てばいいではないか。

——ミッドウェー島はどうか。

という意見が出た。

なぜミッドウェーだったか。

それは、十六機のB-25による東京初空襲（四月十八日）に遠因があつた。ドウリットル部隊を載せた空母はサンフランシスコ港から出たのだが、大本営は

——彼らはミッドウェー方面海域から発進した。

と推測した。本国西海岸から太平洋を横断して攻めてくる

とは考えもしなかった。

このため

——ミッドウエーを抑えれば、アメリカ艦隊を封じ込めることができる。

と考えた。

加えて東京初空襲の仇討ちという意味も込められていた。かねて海軍は「積極的敵艦隊殲滅論」を主張し、陸軍に連携作戦の発動を求めていた。ミッドウエー諸島はアリユーシャン列島とハワイ諸島の中間にあつて、ここを抑えることは、ハワイ攻略を目指す海軍、北辺防衛の強化を指向する陸軍の双方に利があつた。以上のことから、海軍の構想はにわかにな具体的な作戦に転換した。

一方、アメリカ合衆国政府と太平洋方面軍は、暗号の解説でこの事実をつかんでおおいに焦つた。それで彼らは、必ずや日本軍のハワイ上陸作戦が実行されるであろうことを確信した。だが、太平洋艦隊の艦船は広大な太平洋に散開し、それぞれの局面で対峙する日本軍との戦いに疲労を重ねていた。

ワシントンの海軍省作戦部は

——日本軍はハワイを真っ直ぐ目指してくる。

と判断していたが、太平洋艦隊司令長官であり太平洋洋戦地域司令官のニミッツ（海軍大将）は

——自分が山本の立場だったらどうするか。

と考えていた。

ニミッツが考えたのは、

——ハワイが射程に入る島に恒久的な飛行場を建設するという事だつた。

そうすれば艦船の被害を気にすることなく、いつでも攻撃機を出撃させることができる。

この時点でハワイの太平洋艦隊司令部情報部は、ウエーキ島で回収された日本海軍の暗号表をもとに、日本軍の暗号解読作業を進めていた。

五月に入つてのことだつたが、情報部に勤務していたジヨセフ・ロシユフォートという中佐が、日本軍の電信の中に「AF」という符号がしきりに入るようになったことに気がついた。

——AFは日本軍の次の作戦目標ではないか。

と考えたロシユフォートは、ニミッツの迷惑を受けて

——ミッドウエー島の蒸留施設が故障している。

という無電を、わざと平文で打った。

すると日本軍の電文に

——AFは目下飲料水の欠乏に悩んでいる。

という連絡電が登場した。これで「AF」がミッドウエーを意味していることが判明した。

この話には異説があつて、というのはこの時点でアメリカ軍は日本軍の暗号はあらかた解読できていた。「AF」が日本海軍の次の攻撃目標ということは分かつていたので、条件に合わない軍事拠点を消し込んで「AFミッドウェー」を割り出した、という。

ともあれ五月十五日、ニミッツは太平洋に展開している空母に、ハワイに大至急で帰還するよう命令を出した。主力の「ホーネット」と「エンタープライズ」が真珠湾に入つたのは同月二十六日、サンゴ海海戦で大破した「ヨークタウン」が帰還したのは翌二十七日である。

「ホーネット」と「エンタープライズ」には、新しい戦闘機、艦上爆撃機が積み込まれ、新たな搭乗員とたっぷりの食糧が補充された。大破した「ヨークタウン」はただちにドライドックに入つたが、このときアメリカ海軍の機械力がいかになく発揮された。

一千四百人の作業員が徹夜の作業に取りかかった。かくして三隻の空母は五月二十八、二十九日に相次いでミッドウェーに向けて出撃して行つた。「ヨークタウン」には一千四百人の作業員がそのまま乗り組み、航海しながら修理が進められた。

アメリカ太平洋艦隊の兵力は空母三、重巡洋艦七、軽巡洋艦一、駆逐艦十七、艦船搭載の砲門百四十、艦載機二百

三十三機、ミッドウェー基地航空隊保有機百二十一機である。

ほぼ時期を同じくして日本海軍も行動を起こしていた。

5月

26日 空母「龍驤」「隼鷹」（第四航空戦隊）が大湊湾を出港。

27日 空母「赤城」「加賀」「飛龍」「蒼龍」（第一機動部隊）が広島湾を出港。

28日 陸戦隊船団がサイパン港を出港。

29日 攻略部隊本部が広島港を出港。

同日 戦艦「大和」が呉港を出港。

山本五十六が立てた作戦は次のようだった。

一、まず第四航空戦隊はアリユンシャン列島グッチハーバーのアメリカ軍基地を叩く。これによりミッドウェーへのアメリカ軍支援を遮断する。

二、次に南雲中将率いる第一機動部隊がミッドウェー島のアメリカ軍基地を攻撃し、ここに陸戦隊を上陸させて占領する。

三、旗艦「大和」以下の砲艦は後方に控え、アメリカ太

平洋艦隊主力と正面で対峙し、艦隊決戦を挑む。

四、さらに陸戦部隊をハワイに運び、艦砲射撃のち陸上戦に持ち込んでこれを占領する。

五、しかるのち連合艦隊主力はトラック島に再び集結してフィジー、サモア、ニューカレドニアといった諸島を陥す。

六、精銳の機動部隊はオーストラリアのシドニーを空襲、連合国軍に壊滅的な打撃を与える。

七、これを受けて連合艦隊は再びハワイを攻略・占領して、アメリカ西海岸の空襲を目指す。

太平洋戦争が第二段階に入ったことを意味していた。これが成就すれば、対米英戦の勝機もしくは、日本にとつて有利な条件での和平交渉が見えてくるであろう。実際に血を流すことも人が死ぬこともないシミュレーション・ゲームや空想小説では稀にそのようなストーリーが描かれることがある。だが本編の中では、いま現在、多くの人々が傷つき命を落としている。

第二次大戦が終了したあと、アメリカ合衆国の海軍大学はミッドウェー海戦をしばしば教習の素材に使った。自国海軍が大勝利をあげたというだけでなく、これ以外、後にも先にも教習の素材に相応しい実戦がなかった。

その結果、彼らは

——空母の数、航空機の性能、搭乗員の戦闘経験においては、日本軍側が有利だった。

と分析した。

対してアメリカ海軍は、

——情報、奇襲、相対的な位置、空母の作戦使用技術、

レーダー、自動無線帰投装置、基地航空隊などにおいて優位だった。

と指摘している。

山本五十六の思惑通りにコトが進んでいけば、太平洋戦争の帰趨は大きく変わっていたはずである。だがアメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊を待ち受ける立場にあった。作戦を立てる時間は十分にあった。

~~~~~ 補注 ~~~~~

アーネスト・キング Ernest Joseph King / 1887-1966。  
第二次大戦中、アメリカ合衆国海軍の制服組トップだった。一九四四年十二月元帥となり、対日戦略では航空兵力と海軍艦隊で日本本土とインドシナ、フィリピン、インドネシアの補給路を遮断する作戦を立てた。

**ABDA部隊** アメリカ(America: A)、イギリス(British: B)、オランダ(Dutch: D)、オーストラリア(Australia: A)のアルファベット頭文字に由来する。対日多国軍で、総司令長官はイギリス軍駐インド軍司令官アーチボルド・ウェーヴェル大将だった。緒戦でイギリス東洋艦隊とフィリピンのアメリカ軍が消滅してしまったため、四二年二月、イギリスのチャーチル首相の判断で解散した。これに代わるものとして南西太平洋方面軍が編成され、ダグラス・マッカーサーが指揮官となった。

**遣独視察団** 一九四〇年十月から四一年四月にかけて陸軍が指揮官や技官を派遣しナチス・ドイツの新兵器や新用兵を学んだ。同時期に海軍も同様な視察団を別途派遣している。

**真珠湾奇襲攻撃** 「ト・ト・ト」電が発信されたのは日本時間は十二月八日午前三時二十二分だった。コタバル上陸の二時間後だったが、連合国側に情報を秘匿するため陸軍と海軍は交信していなかった。日付変更線の関係でハワイ攻撃は「前日」となった。

**オーストラリアへの空襲** 一九四二年二月十九日、日本の機動部隊がダーウインを攻撃した。第一次攻撃隊は空母から発進した零

戦十八機、艦上攻撃機七十三機、第二次攻撃隊はセレベス島などの航空基地から双発爆撃機五十四機による空襲で、全くの不意打ちだった。このためダーウインの軍事施設は大きな損害を受け、港に集結していた連合国軍艦船二十三隻すべてが沈没または壊滅的打撃を受けた。死者は民間人・軍人計二百四十三人だった。

**エルウッド製油所** カリフォルニア州サンタバーバラの石油採掘・製油工場。伊-17潜水艦が艦砲射撃を行った。分厚い鉄鋼に当たって爆発する徹甲弾だったため、砲弾の多くは不発だった。

**伊号潜水艦による米本土艦砲射撃** 六月二十日のバンクーバー砲撃、同二十一日のフォート・ステイブンス陸軍基地砲撃である。

また、アメリカ本土には四二年九月に零式艦上戦闘機が焼夷弾を抱えて出撃した。ただしアメリカ本土上空を飛んだのはただの一機だった。その零戦は翼を切って折れたためるように改良した偵察機タイプで、伊-25号潜水艦に搭載され、ロサンゼルス沖で飛び立った。上空からロサンゼルス市を撮影し、オレゴン州の山林に焼夷弾を落とした。

**ロサンゼルス**の戦い ロサンゼルス・ヘラルド・エグゼミネーターは、「目撃者は飛行機の数を五十機、三機が海上で撃墜された」と報じた。

**フランクリン・ノックス** William Franklin Knox / 1874-1944。一九三六年共和党副大統領候補だった。

**第二次大戦中の在米日系移民** 日本が宣戦を布告するのとほぼ同時に、まずカリフォルニア州在住の日系人が資産を没収されたうえ同州内十か所の収容所に隔離された。ハワイ在住の日系人はアメリカ本土西海岸の収容所に強制送還されるか、子息が海兵隊に志願して家族の生活を保障することになった。ヨーロッパ戦線に



「おける日系人部隊の三分の二がハワイからの志願兵だった。こうした中からロバート・マツナガ上院議員やダニエル・イノウエ上院議員などが出た。

ウオツジエ環礁 陸地部分八平方キロメートルで、マーシャル諸島の中で最大規模の島とされる。第二次大戦中、ここには連合艦隊第四艦隊の陸戦部隊三千五百人が駐留していた。一九四四年一月三十日、アメリカ軍の爆撃と艦砲射撃で砲台が破壊され、餓死を含め二千九百人の死者を出した。

島上の海軍航空基地構想 いわゆる「不沈空母」構想。海軍参謀だった源田實が発案したとされる。太平洋の島々に海軍航空部隊を配備し、島を空母に見立てて適時作戦行動に援用するという考えで、これにより第一航空艦隊（一航艦）が編成された。艦船を保有しない艦隊で、事実上、空軍に近かった。

ジョセフ・ロシュフォート Joseph Rochefort / 1900 ~ 1976. オハイオ州デイトンで生まれ、少年のころからクロスワードパズルを解くことに熱中した。一九一八年海軍に入り、二六年に新設された通信部門の暗号解読組織「OP-20-G」のチーフとなった。その後日本語教育を受けてハワイ基地に赴任し、大日本帝国海軍の暗号解読に当たった。

ダッチハーバー アリユーション列島のアラスカ寄りにある。アメリカ軍は日本軍によるアメリカ本土への空襲や上陸があるとすれば、中部太平洋→ハワイのルートか、アリユーション列島→カナダ→アメリカ本土のルートと想定していた。中でもダッチハーバーは軍港として利用できる条件を整えていて、日米どちらにとっても確保しておきたい（ないし敵に利用されたくない）要所だった。

065 空母对空母

第六十五

空母対空母

一

われわれは歴史を学ぶなかで、太平洋戦争は艦隊決戦の時代から航空機主導の時代へ転換する経過を見ることになる。二キロ、三キロを隔てて大砲を撃ち合う艦隊決戦では、砲弾の大半が無駄になる。しかも艦が沈没すれば攻撃力はゼロになってしまう。

に対して数十キロ、場合によっては百キロ以上、波濤を隔てて航空機で爆弾を運べば、命中確率は飛躍的に高くなり、結果として安くつく。戦争も経済効率で動くというところだが、そのためには索敵の技術が重要になる。最後は目視による確認であるとしても、まずはレーダーで群影をとらえ、目視した情報を電信で伝えなければならぬ。

イギリス空軍機がナチス・ドイツの戦艦「ピスマルク」を叩きのめして「浮かぶ廃墟」にし、大日本帝国の陸上攻撃機がイギリスの戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を沈没せしめた。ここまでは目視が優先し、電波は副次的な

役割だった。

では、その航空機を艦載し、発着させる空母と空母が大海原で向かい合ったらどういうことになるか、である。世界の戦争史上、初めて行われた空母対空母の戦いとして、サンゴ海海戦は、記録に残っている。

事前に理解を促すために書くと、サンゴ海はオーストラリアの西北側に広がる海域であって、北からニューギニア島、ソロモン諸島、ニューヘブリデーズ諸島、ニューカレドニア島に囲まれている。

発端は四二年の一月二十三日、日本がソロモン諸島の北端にあるニューブリテン島を占領したことにあった。日本の大本営外軍部（軍令部）がねらったのは、アメリカ軍とオーストラリア軍の分断だった。

まず南方における連合国軍の動きを封じ込める。その上で、アメリカ太平洋艦隊と決戦してこれを殲滅し、しかるのちにハワイ上陸作戦を実施するという構想である。

そこで日本軍は、ニューブリテン島ラバウル基地に台湾から海軍航空部隊を進出させ、ここを拠点にニューギニア島南端のポートモレスビーにある連合国軍基地をしきりに空襲した。連合国軍もB-25などでラバウルを集中的に空襲し、あるいは潜水艦で日本の輸送船を攻撃するなど双方が激しい消耗戦を繰り広げた。ラバウル航空隊の奮戦が

伝説となるのはこのときの戦いである。

五月四日、日本軍がガダルカナル島の北に浮かぶツラギ島を占領して進攻の構えを見せると、アメリカ軍は空母「レキシントン」と「ヨークタウン」を出動させ、ツラギ守備隊に猛烈な空襲をかけた。大日本帝国海軍はこれに対抗して空母「瑞鶴」「翔鶴」、改造空母「祥鳳」を繰り出し、八日に空母対空母の決戦が火蓋を切った。

この戦いで日本軍は「レキシントン」を沈め、「ヨークタウン」を大破させた。その代償として「祥鳳」を失い、「翔鶴」が大破した。艦船の被害からいうと、かろうじて日本軍に軍配が上がるかたちだが、損失は日本軍のほうが大きかった。

それというのは、日本軍が多くの搭乗員、戦闘員を失ったのだ。このとき被弾した空母に艦載機が着陸できず、海上に没するという状況が発生した。航空機は補充できるが、搭乗員は簡単に養成できない。

日本の軍隊では明治から一貫して「戦陣訓」というものが重視された。戦いに勝っても、個別の作戦、指揮官の判断、個々の兵士の行動というものには必ず反省すべきことがある、という考え方だった。教訓から学び、少しでも改善しようとした。

第一次大戦までの日本は、より客観的に教訓をとらえよ

うとした。だが日中戦争が泥沼化して以後、精神論に傾斜していく。

空母対空母の戦いでは、飛び立った艦載機の帰艦を確実に保証することが最も重要である。そのことに、日本軍は気がつかなかったのではなく、分かってはいた。しかし日本軍の航空機に搭載されていた音声無線（無線電話）は雑音が多く、ほとんど通じなかった。

飛び立っていった攻撃機の編隊に母艦は指令できず、編隊を作っている航空機の間でも通信ができなかった。「トン・ツー」のモール信号は使えたが、全機に搭載されていなかった。母艦と編隊はお互いに何が起きているかを知らなかった。

一部の艦載機には方位検出装置が搭載されていた。しかしそれも性能が悪かった。クルシー式空三号無線帰投方位測定機がそれだ。アメリカのフェアチャイルド社が開発した製品を輸入して国産化したものだったが、十年以上前の古い技術から前進していなかった。

このため攻撃を終えて引き返す航空編隊は、母艦の所在地を探すのに一苦労した。間違えてアメリカの空母に着艦しかかったケースもあった。

対してアメリカ海軍はそのことに気がついていて、かつ物的な対策を講じていた。まず大型空母とともに、動きが

軽俊な小型空母を量産した。ばかりでなく、後方の部隊に交換用の航空機と搭乗員を乗せた予備空母を配置していた。

また味方空母が発する誘導電波を受信できる装置を航空機に組み込んだ。さらに航空機が不時着したとき、搭乗員が海上に浮かんでいられる救命具と、その位置を知らせる信号発信装置を配布した。駆逐艦や魚雷艇などは信号を頼りに、航空機搭乗員を救出することができた。

——日本軍は人命を軽視し、アメリカ軍は重視した。

といわれる。

事実、そうだったが、仮に日本軍が人命を重視したとしても、できなかった。

このことが日本時間六月五日に行われたミッドウェー海戦につながっていく。

## 二

ミッドウェー海戦（連合艦隊「MI作戦」）に連合艦隊が繰り出した艦船は「すごい」の一語に尽きる。

### 第一機動部隊

- ・ 空母四…赤城、加賀、飛龍、蒼龍
- ・ 戦艦二…榛名、霧島

・ 重巡洋艦…利根、筑摩

・ 軽巡洋艦一…長良

・ 駆逐艦…嵐、野分、萩風、舞風、風雲、夕雲、巻雲、

秋風、磯風、浦風、浜風、谷風

・ 油槽艦八

連合艦隊本隊

・ 空母二…鳳翔、瑞鳳

・ 戦艦七…大和、長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城

・ 軽巡洋艦二…北上、大井

・ 駆逐艦二十…吹雪、白雪、初雪、叢雲、磯波、浦波、

敷波、綾波、夕風、有明、海風、江風、夕暮、

白露、時雨、天霧、朝霧、夕霧、白雲、山風

この後方に攻略部隊（戦艦二、重巡洋艦四、軽巡洋艦一、駆逐艦八、油槽艦四）、攻略部隊支援隊（重巡洋艦四、駆逐艦二、油槽艦一）、攻略部隊護衛隊（軽巡洋艦一、駆逐艦十、哨戒艇三、油槽艦一、輸送船十二）が続き、伊号潜水艦二十三、潜水母艦六などが続いていた。

十二隻の輸送船には、ミッドウェー島、ひいてはハワイに上陸する陸戦兵七千六百人が乗っていた。総兵力十万人である。真珠湾攻撃の際の日本海軍機動部隊より、はるかに規模が大きい。

乾坤一擲の大決戦は、結果を知っているわれわれからすると「丁か半か」の賭博のようにも見える。作戦がうまく当たってればアメリカ太平洋艦隊は壊滅し、ミッドウェー島は大日本帝国が占領することになっていた。しかし全く逆の結果になった。

直接の敗因は、

- ・陸用爆弾から魚雷への転換
- ・攻撃編隊の着艦か、攻撃隊の発艦か

この二つの判断ミスが重なった。帰還する日本の攻撃編隊の後ろについていったアメリカ軍攻撃編隊にとってラッキーだったのは、第一機動部隊の空母を旋回していた直掩機の燃料切れが迫っていたことだった。

連合艦隊の体勢についても、数々の敗因が指摘されている。

- ・海軍軍令部と連合艦隊（山本五十六）との齟齬。
- ・作戦の目的が曖昧だった。ミッドウェー島占領なのかアメリカ太平洋艦隊撃滅なのか。
- ・ミッドウェー占領後の展望がなかった。
- ・南雲部隊の意思統一ができていなかった。

・第一機動部隊と連合艦隊本隊は三百キロ以上も離れて航行していた。艦隊本隊が戦いに参加していれば事態は大きく違った。

・日本の空母は板の甲板で艦内は密閉度が高かった。このため被弾すると爆風の被害が大きかった。また火災が発生したとき、可燃物を船外に破棄することが難しかった。

等々である。

——情報収集と分析能力の差が勝敗を左右した。

という指摘もある。

この海戦で、日本の第一機動部隊はアメリカ空母艦隊の居場所を見つけるのに無駄な時間を費やした。四方八方に飛ばした索敵機に依存するほかなかった。この海戦では、索敵機がアメリカ艦隊を発見していたが、無線の電波出力が弱かったために正確な情報を伝達できなかった。

アメリカ軍も同じように索敵機を飛ばしたが、日本軍と決定的に違ったのは、同時に無線通信とレーダーを活用したことだった。

索敵機は何も発見できなかったが、追尾する潜水艦が日本艦隊の位置を逐一報告し、ミッドウェー島基地のレーダーが日本の連合艦隊空母群の所在を探り当て、さらに攻撃

機を電波で誘導して戦果を拡大した。

三

日本海軍の空母群は、ミッドウエー島攻撃隊からの「第二次攻撃隊ノ要アリ」という報告を受けて、甲板に並んだ攻撃機の爆装を艦船用から陸上用に転換した。さらに利根四番機からの報告「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」を受けて、甲板上の航空機の爆装を再び艦船用に転換しようとした。

そこに、第一次攻撃隊が帰ってきた。

南雲は予定通り第一次攻撃隊の収容を優先し、それが終わった。第一次攻撃隊を収容してから第二次攻撃隊を発艦させても遅くはない。このため今度は甲板上の航空機を再収容する作業が始まった。

その判断が空母決戦のタイミングを逸した。このとき、日本の第一次攻撃隊のあとを追ってきた敵航空隊が日本艦隊の上空に到着した。

空母は帰艦機を収容しているときか発艦させているときが最も弱い。甲板を大きく広げているだけでなく、高射砲や煙幕などを打ち上げることができない。アメリカ軍航空

機はそのタイミングをねらって奇襲をかけるかたちになった。

日本の空母三隻への命中弾は二発ないし四発だったので、通常の爆弾であれば各艦とも中破か大破の被害で済んだはずだった。ところが爆弾のなかに、新型爆弾が混ざっていた。落下した数秒後に起爆装置が働くのである。

これが被害を拡大した。

甲板上に並んだ攻撃機が横転し、装填しつつあった爆弾に火が移った。

投弾や機銃掃射は思うがままだった。投下した爆弾は確実に日本海軍の空母甲板に落下していった。その甲板には燃料を満載した攻撃機が整列し、爆弾や魚雷を装備していた。誘爆が被害を大きくした。

格納庫の魚雷が爆発し、「加賀」「蒼龍」は沈没、「赤城」は大破・炎上し味方の魚雷で処分された。

帰還しようとした第一次攻撃隊の約百機は、着艦すべき空母が大破または沈没してしまったため、燃料切れで次々に海中に墜落した。

このときやや北に離れていたために無傷だった空母「飛龍」は、搭乗員を救助すべきだった。だが第二航空司令・山口少将はそれを後回しにした。

午前十時五十分、独断で発令した。

「全機今ヨリ発進、敵空母ヲ殲滅セントス」

飛龍から発艦した攻撃機は二十四機だった。この攻撃隊の第一波はアメリカ空母上空を援護していた戦闘機を振り切つて、ヨークタウンに三発の命中弾を与え大破させた。第二波はヨークタウンに魚雷二発を命中させ、巡洋艦一隻にも損害を与えた。

その間、山口は上空にとどまっていた赤城、加賀所属の残存機十五機を回収し最後の攻撃を準備した。

そこにエンタープライズから発進した急降下爆撃機十三機が来襲した。飛龍の上空を守る戦闘機は一機もなかった。アメリカ軍機は楽々と投弾し、四発の命中弾を加えた。

爆弾四発が艦橋付近に命中し、発生した火災が全艦に広がった。「飛龍」に対して行われたアメリカ軍の攻撃は、最終的に航空機百十五機、魚雷二十六本、爆弾七十発に達したという。

午後五時十分、沈没。

日本海軍は「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の空母四隻、重巡「三隈」、艦載機三百二十一機および、三千五百人の人員を失った。アメリカ海軍の損失は空母「ヨークタウン」、重巡「ハンマン」、艦載機百五十機、人員三百七人だった。

日本軍の常勝に歯止めがかかった瞬間だった。

#### 四

この戦いを大本営は次のように発表した。

東太平洋全海域に作戦中の帝国海軍部隊は六月四日、アリューシャン列島の敵拠点ダッチハーバー並びに同列島一帯を急襲し四日、五日、両日に互り反復之を攻撃せり、一方同五日洋心の敵根拠地ミッドウエーに対し猛烈なる強襲を敢行すると共に、同方面に増援中の米國艦隊を捕捉猛攻を加え敵海上及航空兵力並に重要軍事施設に甚大なる損害を与えたり、更に同七日以後陸軍部隊と緊密なる協同の下にアリューシャン列島の諸要点を攻略し目下尚作戦続行中なり、現在までに判明せる戦果左のごとし。

一、ミッドウエー方面。

(イ) 米航空母艦エンタープライズ型一隻及ホーネット型一隻撃沈。

(ロ) 彼我上空に於いて撃沈せる飛行機約百二十機。

(ハ) 重要軍事施設爆破。

二、ダッチハーバー方面。

(イ) 撃沈せる飛行機十四機。

(ロ) 大型輸送船一隻撃沈。



(ハ) 重油槽群二ヶ所、大格納庫一棟爆破炎上。

三、本作戦における我が方損害。

(イ) 航空母艦一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破。

(ロ) 未帰還飛行機三十五機。

当時、軍事専門家は次のように指摘した。

「大和以下の戦艦が十一隻も随行していながら、空母群と三百マイルも離れたところを航行していた。これでは空母決戦となったとき、いかに全速力で駆けつけても敵空母群を砲撃することは不可能ではないか」

「戦艦艦隊は自らが標的となつて敵空母艦載機を引き寄せ、重装備の火砲で応戦しつつ、その間ながら空きとなつた無防備の敵空母群を叩くという戦術がなぜ取れなかつたか」

だが日本帝国海軍は十分な能力を持つレーダーを備えていなかった。ゆえにそれができなかった。

連合艦隊は翌日の昼間攻撃を検討したが、アメリカ艦隊は早々に退避して戦場を離脱していた。索敵機では捕捉できないために、追撃を諦めざるを得なかつた。

これに対してアメリカは次のように戦果を評価した。

——空母二ないし三を撃沈破、他の一ないし二空母を大破せしめたものと見られる。

六月六日、アメリカ太平洋艦隊指令長官ニミッツは次のようなコメントを発表した。

「真珠湾の復讐は、一部成就された。しかし、完全な復讐は、日本海軍が無能力になるまでは達成されないだろう。その方向に向かって、われわれは重要な前進をした。われわれはいまや、目標のなかば（ミッドウエー）に達したといつても、それは認められるだろう」

## 補注

戦陣訓 明治期に西洋流軍隊制度が導入されるのと同時に移入された考え方で、戦いに勝ったあとでも味方の勝因と敵の敗因を分析し次の作戦に活かすことを指していた。ところが一九四一年、陸軍大臣東条英機の名で全軍に示された『戦陣訓』は、「生きて虜囚の辱(はずかしめ)を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」など、全将兵に死を強制する役割を果たした。併せて「戦陣訓の歌」も作られた。生きて捕虜になった者やその家族は「非国民」と非難された。

ポートモレスビー ニューギニア島の東南に伸びた半島のほぼ中央、オーストラリア側にある。日本軍にとってはオーストラリアに上陸する橋頭堡、連合国軍にとつてはルソン島↓台湾島↓沖縄↓九州と反攻・北上する起点として重要な位置にあった。日本軍のラバウル航空隊、ブーゲンビル島占領、サンゴ海海戦などはすべてポートモレスビー攻略のための作戦だったが、サンゴ海海戦の勝利と引替えにポートモレスビー攻略の意味が見失われた。山本五十六の死が太平洋戦争における日本海軍の戦略を狂わせた。

ラバウル航空隊 日本軍はガダルカナル島を抑え、さらに南進してオーストラリアに上陸する構想を持っていた。このためガダルカナル島北西のニューブリテン島、ブーゲンビル島に航空基地を建設して連合国軍に圧力をかけた。ニューブリテン島東端にあった航空基地がラバウルである。ここには台湾航空隊の零戦部隊が進駐し、ニューギニア島のポートモレスビーに連日の猛攻撃をかけた。

連合国軍はラバウルに向けてB-25の編隊を繰り出して反撃した。それによって、一九四四年の時点では日本軍の航空機はほとんど破壊され、航空基地としての機能を失った。基地の整備兵たちはそれでも零戦の残骸をかき集め、複座式の偵察用零戦を二機組み立てた。そのうちの一機が一九七二年八月、ラバウルの沖合い十キロの海底から引き揚げられ、これが国立科学博物館に保存されている。

フェアチャイルド社 Fairchild: 一九二〇年二月、シャーマン・フェアチャイルド (Sherman Mills Fairchild / 1896 ~ 1971) が設立したフェアチャイルド・エアリアル・カメラ・コーポレーションを前身とする航空機用精密機材メーカー。第二次大戦後、シリコンバレーの起点となるフェアチャイルド・セミコンダクター社の出資元でもある。ジョージ・フェアチャイルド (George Winthrop Fairchild / 1854 ~ 1924) は一九一五年から二四年までコンピュータイング・タービュレーターイング・レコーディング (CTR のちIBM) 社の会長を務めた。

ミッドウエー海戦 (一九四二年六月五・六日) 文頭の数字は時刻を示す。

## 六月五日

〇四三〇 赤城、加賀、飛竜、蒼竜からミッドウエー島攻撃のため百八機が発艦。

巡洋艦「利根」から索敵機七機が発進

〇五三四 アメリカ軍飛行艇「PB Y5」日本軍機動部隊を発見

〇六〇三 PB Y5 飛行艇からアメリカ太平洋艦隊に報告「敵空母二隻、戦艦数隻、ミッドウエーの三二〇度、一八〇マイル。針路一三五度、速力二五ノット」

〇六三〇 ミッドウエー島攻撃隊が島守備隊と交戦開始

〇七〇〇 ミッドウエー島攻撃隊より報告「第二次攻撃隊ノ要アリ」

〇七一〇 アメリカ軍雷撃機十機が日本機動部隊を攻撃(九機撃墜)

機動部隊司令長官・南雲中将より発令「第二次攻撃隊本日実施。待機攻撃隊爆装二換工」

〇七五五 アメリカ軍急降下爆撃機十六機が「飛龍」を攻撃(八機撃墜)

〇八〇〇 利根四番機から報告「敵ラシキモノ十隻見ユ、ミッドウエーヨリノ方位一〇度、二四〇マイル、針路一五〇度、速力二〇(ノット)以上」

南雲中将より利根四番機に返電「敵艦種を知らセ」

利根四番機「敵兵力ハ巡洋艦五隻、駆逐艦五隻ナリ」

利根四番機「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」

〇八三〇 利根四番機「サラニ敵巡洋艦ラシキモノ二隻見ユ。ミッドウエーヨリノ方位八度、一五〇マイル、敵針一五〇度、速力二〇ノット」

南雲中将から山本連合艦隊長官に打電「敵航空母艦一、巡洋艦五、駆逐艦五、ミッドウエーノ一〇度、二四〇マイルニ認め、コレニ向ウ」

空母「飛龍」山口二航空司令から意見具申「直チニ攻撃隊発進ノ要アリト認め」

南雲中将、山口少将に返電「揚収終レバ一旦北ニ向ウ

敵機動部隊ヲ捕捉撃滅センス」

「筑摩」から利根四番機応援の索敵機が発進

〇九〇七 第八戦隊司令官阿部少将より利根四番機に打電「筑摩機来ルマデ接触セヨ。長波幅射セヨ」

〇九二五 利根四番機「ワレ燃料不足、接触ヲ止メ帰投ス」

〇九三五 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇〇マデマテ」

〇九三八 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九三九 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇〇マデマテ」

〇九四一 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九五五 駆逐艦「嵐」が米潜水艦ノーチラスを雷撃

一〇〇〇 「ホーネット」発艦の雷撃機四十一機が機動部隊を攻撃(三十五機を撃墜)

一〇二〇 南雲中将より発令「第二次攻撃隊、準備出来次第発艦セヨ」

一〇二四 空母「赤城」艦上スピーカー「発艦はじめ」

一〇二六 アメリカ軍機が急降下し投弾開始

一〇四四 空母「蒼龍」が被弾

一一〇〇 空母「蒼龍」総員退去

一一二〇 空母「飛龍」から第一波攻撃隊が発艦

一一三〇 「飛龍」発艦の第一波攻撃隊がアメリカ軍空母「エンタープライズ」を攻撃

一一三〇 「エンタープライズ」に火災が発生

一六二三 第一機動部隊司令官・南雲中将が軽巡洋艦「長良」に移乗

一六二三 空母「加賀」総員退去

一七三〇 アメリカ軍「ヨークタウン」発艦の爆撃隊、「エンタ

ープライズ」発艦の攻撃機が「飛龍」を爆撃

一九一三 空母「蒼龍」沈没

一九二五 空母「赤城」総員退去

空母「加賀」が大爆発を起こし沈没

六月五日

〇二三〇 空母「飛龍」総員退去

駆逐艦「卷雲」が「飛龍」に魚雷を発射

〇六一五 空母「飛龍」沈没

# 日本IT書紀 04 含牙篇 卷之八 重濁

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。